

2009年度鳴門市人権地域フォーラム

テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2009年8月19日(水)13:30～16:30

■ところ 鳴門地域地場産業振興センター

コーディネーター A(北島中学校教諭)

パネリスト B(解放未来塾初代塾長)

C(泉大津市戎小学校教諭)

D(米子市人権政策課指導職員)

《司会者》

ただいまより、2009年度「人権地域フォーラム」を開会いたします。開会にあたり、鳴門市教育次長中村がご挨拶申し上げます。

《鳴門市教育次長》

皆さん、こんにちは。(会場より「こんにちは」)本来でしたら、教育長が参りまして、皆様方にご挨拶を申し上げるところでございますが、本日はあいにく出張をしておりますので、私、教育次長の中村が、教育長の挨拶文を預かってまいりましたので、代読をさせていただきます。

「教育長の挨拶文」

本日は残暑厳しい折、また、ご多忙な中を各地から多数の皆様方にご参加をいただき、2009年度「人権地域フォーラム」がこのように盛大に開催されますことを、心から厚くお礼申し上げます。

また、皆様方におかれましては、日頃から地域や職場でそれぞれのお立場から、同和問題をはじめさまざまな人権問題の解決のため、積極的にお取り組みいただいておりますことに対しまして、心から敬意と感謝を申し上げます。

さて、本市におきましては、これまで皆様のご尽力をいただきながら、人権問題の解決に向けた各種施策の総合的な取り組みを推進してまいりました。しかし、今だ差別の完全な解消には至っておらず、同和問題をはじめ深刻な人権課題が存在しております。

人権を取り巻く環境も複雑化しており、人権感覚の鋭い人ほど、一步外へ出ますと、否応なく「これはおかしい」「これは違う」と思うような場面もあります。また、生命の尊さを軽視した事件や出来事が日々報道され、心を痛めております。情報化や国際化の進展など社会経済情勢の変化に伴い、インターネットによる人権侵害等新たな課題も生じており、人権問題の複雑かつ多様化傾向が進行しております。

こうした状況の中、「人権地域フォーラム」が本日開催されますことは、自分自身を見つめなおし、広い視野に立って人権を考える上で大変有意義な時間になると確信しております。『「ひとつと」から「わがこと」へ』このテーマに、語りを通して人権教育の可能性やよろこびを探求し、互いの人権感覚、人権意識を高め、人と人との温かいつながりを感じることで、実りの多い研修となつていただくことを願っております。

最後になりましたが、本年度も、この「人権地域フォーラム」が、松茂町、北島町、藍住町、板野町、上板町の各教育委員会、および、人権教育推進協議会関係者。そして、コーディネーター、パネリストの皆様方の積極的なご協力をいただき開催できますことに対し、改めて心より厚くお礼申し上げますご挨拶といたしま

す。

2009年 8月19日 鳴門市教育委員会教育長 近藤芳夫」(拍手)

《司会者》

ありがとうございました。それでは、本日の「人権地域フォーラム」にお招きいたしました講師の方々をご紹介させていただきます。講師の皆様は、お名前をお読みいたしますので、随時壇上の席の方へご移動くださいますようお願いいたします。

はじめに、本日のフォーラムのコーディネーター、北島中学校教諭 Aさんです。(講師の移動とともに会場から拍手が起こる。司会者は、講師が席に着くのを待ち次に進む。各パネリストもこの順で繰り返される)続きまして、パネリストの方々をご紹介させていただきます。鳥取県米子市人権政策課指導職員のDさんです。(拍手)大阪市泉大津市立戎小学校教諭のCさんです。(拍手)愛媛県愛南町「解放未来塾」初代塾長のBさんです。(拍手)

本日は、以上4名の講師の皆様方に、「ひとごとからわがことへ ～自己をみつめ 語り 人と人がつながる人権学習～」というテーマでフォーラムを進めていただきます。それではA先生、進行につきましてよろしく願いいたします。

《コーディネーター A》

皆さん、こんにちは。(会場より、「こんにちは」)一昨年からたくさんの中学生、高校生が社会教育の場に参画し、さまざまな思いや願いを自分の言葉で語ってくれるようになりました。昨年も、20数年来お世話になっている方が、この会が終わって、「私は初めて同和問題の研修会に来た。こんなに思いが込み上げた経験は今までにない。」と話してくださいました。

昨年度のフォーラムの最後に、差別を乗り越えてきたN君とパートナーのHちゃんがその思いを語りました。Hちゃんがマイクを握りました。N君が、長男の里温君を肩車しました。Hちゃんがその思いを語る場面、言葉が私たちをつないでいきます。言葉の力。そこに生まれる深い絆。そんな感動が、私たちの生きる力になります。

先日、8月9日に「鳴門市人権福祉センター」で「中学生交流集会」がありました。その中で、鳴門市と板野郡の中学生在が切々と思いを語ってくれました。そこには、鳥取から参加してくれた中学生もいました。香川県から参加してくれた中学生がいました。思いが思いをつないでいきます。まだまだ厳しい部落差別の現実があります。しかし、その問題を見事に乗り越えていく中学生の輝きに、この教育の可能性を実感します。

今日、3人のパネリストの思いを受け、後半は昨年までと同様に会場にマイクを回します。ここに集まった一人一人の思いが、一人一人の中に広がる。出会えたよろこび、つながり合えたよろこびを実感していく。そんな今日の半日になればと思います。

最初に、愛媛県の愛南町。(身振り手振りで表現しながら)ちょうど四国の端から端になります。長い時間をかけて、Bさんが来てくれました。

ここ数年来、愛南町からたくさんの方に参加していただいて、フロアから思いを語っていただきました。徳島県にとって「地区進出学習会」の取り組みがスタートしたのは、私が中学2年生だった1974年(36年前)です。そんな取り組みが延々とつながってきました。しかし、法が切れ、措置が切れ、学習会がなくなりつつあります。

そんな中、愛南町では数年前に同和問題を考える「解放子ども会」がスタートしました。その名前を「解

放未来塾」と言います。その未来塾の初代塾長であったBさんに、その中で見えてきたもの、感じてきたものへの思いを語っていただきます。彼女は、こんなメッセージを私たちに届けてくれました。

「中学の頃、人権学習の時間が大嫌いでした。それは、周りの子の発言が「ひとごと」になっていたからではありません。自分の発言が「ひとごと」になっていたからです。教室には、本心の言えないつらさが溢れていました。しかし、解放未来塾がスタートし、私たちの生活が大きく変わりました。自分のことを堂々とと言えるようになりました。」

まだまだあえぎながら必死に生きる、中学生・高校生の姿があります。Bさんは、大学へ行ってふるさとを離れました。いろんな思いの中で生きる彼女の姿があります。「私を変えてくれた解放未来塾の取り組み」をテーマにこれから語っていただきます。皆さん、拍手をお願いします。(会場より拍手)

《パネリスト B》

解放未来塾のはじまり

(原稿を広げ、ハッキリした口調で読みながら語り始める)はじめまして。Bと申します。愛南町の旧城辺町にある下長野という同和地区から来ました。今、愛媛の松山で大学生をしています。

私は、2年前の3月まで「解放未来塾」という同和問題について考える会で塾長をしていました。「解放未来塾」は、子どもだけでなく先生や親などの大人も一緒になって、みんなで同和問題について学習する会です。今日は、その「解放未来塾」の紹介と、未来塾を卒業してから思うことを話させていただきたいと思います。

「解放未来塾」は平成17年、2005年の4月に始まりました。私は当時高校1年でした。未来塾が始まるまでは「子ども会」というものをしていました。その「子ども会」では、学校の勉強をみんなでしたり、夏にはキャンプをしたりしていました。しかし、地区のみんなで同和問題について一緒に勉強することはありませんでした。

地区のみんなは、昔から保育園児から高校生まで一緒になって遊ぶくらいとても仲が良かったです。しかし、子ども同士で同和問題について話すことは全くありませんでした。みんな誰が自分の立場を知っているかわからなかったのも、私たちにとって同和問題の話はタブーになっていました。

「解放未来塾」が始まってからは、子ども同士でも、何かあった時に同和問題を話せるようになり、先生や親などの大人が、私たちを部落差別からしっかり守ってくれるという安心感もできてきました。

しかし、未来塾が始まってすぐには、塾生はあまり発言することができませんでした。大人がたくさんいる中で自分のことや自分の思いを語ることはなかなかむずかしいですし、塾生たち自身、いきなり勉強始めて何を言ったらいいのかわからなかったと思います。そんな私たちにとって、ハンセン病回復者の皆さんが暮らす香川県の大島青松園や、平和学習に取り組む長崎の子ども会の仲間と交流し、長崎の被爆地をフィールドワークすることで、未来塾の仲間の中にたくさんの知識と仲間が増え、だんだん発言できるようになりました。

学校では、部落差別があるのになににされていて、毎日は楽しくても安心できる場所とはいえません。でも塾生にとって、「未来塾」はホッとできる場所なんです。みんなで肩を並べて同和問題について勉強することで、安心できる関係が広がっていきつつあります。

未来塾が始まって、私にはさまざまなことがありました。その中でも、特に高校1年の2月のことがとても心に残っています。

2月に私の町、愛南町で「人権ふおーらむ」がありました。その「人権ふおーらむ」では、私が小学2年

の時から下長野に関わってくださっている I 先生が、「解放未来塾」がなぜつくれ、どのような取り組みをしているのかを語ってくれました。今も、学校では、愛南町に同和地区はないという教育をしています。しかし、I 先生は、私たちの地区下長野が同和地区であり、そこにある部落差別をなくしていくために、解放未来塾がスタートしたと宣言してくれました。

この I 先生の言葉によって、ないことにされていたものがあるようになって、見えない差別が見えるようになりました。そこから、私たち塾生は、部落差別をなくしていくという誇りが生まれ、愛南町における人権教育や人権啓発は大きく進んだと思います。

私はこの「人権ふおーらむ」の後、会場に来ていた担任の先生に、クラスみんなに未来塾のことや、地区のことを話す時間をつくってもらうようお願いしました。

ちょうど、その「人権ふおーらむ」の翌日は、私の高校で「A先生の講演と全体学習」がありました。その全体学習の中で、解放未来塾の塾生の1人が、全校生徒に向かって同和地区出身である自分を語り、友人が自分の思いを返していきました。そんな語り合いの学習が、クラスの仲間に大きな刺激になったと思います。私が初めてクラスの仲間に自分の立場を告げるホームルームは、「A先生の全体学習」の翌日に実施されました。

このホームルームは、NHK教育テレビのしゃべり場のように、みんなが向かい合うような形になりました。「人権ふおーらむ」の日から「クラスみんなに地区出身という立場を話すぞ」と心を決めていた私でしたが、やはり、いざ発言するとなった時すごくドキドキしました。みんなはどんな反応をするだろうか。ちゃんと伝わるだろうかと心配でした。でも勇気を出して話しました。

私は未来塾に入っていて、それは同和問題などを勉強するところであること。自分が同和地区出身であることを伝えました。すると1人の子が発言してくれました。その後もポツポツと手が上がってきて、最後の方はみんながしゃべりたい状態になっていました。みんな話してくれてよかったなあと思いました。

話してくれた中でも印象に残ったのは、親の世代は同和教育を受けていなくて、自分の親が差別心(差別意識)を持ってしまっているのがつらいという正直な気持ちでした。それを聞いて、やっぱりまだ親の世代はそんな考えを持ってしまっている人がいるんだなあと思いました。 クラスのみんなは、厳しい部落差別の現実を話してくれましたが、私は、それほど驚きませんでした。それは、中学時代にクラスの子が私の住んでいる地区の方を指さして「あそこ部落なんよね」と言っていたのを聞いたことがあったからです。

学校では部落はないことにされているけど、家庭では具体的に教えられているという現実には、私たち子どもは辛い思いをします。だからこそ、同和問題について学校で正しくしっかりと教えてもらいたいと思います。

高校3年の時、私は愛南町の「人権ふおーらむ」で、解放未来塾の塾長として、パネリストとなり、町の人に向けてお話しさせていただきました。愛南町の「人権ふおーらむ」では、学校の先生が多く参加してくださるので、少しでも生徒の気持ちが伝わればよいなと思いながら発表しました。

そして、私は高校を卒業して、愛南町を去りました。少し不安もありましたが、なにかあったら親や仲間がいるから大丈夫だろうと思いながら大学に入学しました。

大学では高校のように同和問題の授業や集会もないし、未来塾にも参加できないので、同和問題に関わることがほとんどなくなりました。高校を出たら同和問題について考える機会がこんなにも減るんだなあと思いました。愛南町にいる頃よりも、人権や同和問題についてあまり考えないようになりました。けれど、夏休みや春休みに愛南町に帰った時に、未来塾の塾生たちががんばっている姿を見て、私もなにか行動を起こさなくちゃと思いました。

そしてやっと最近、大学の友だちに自分のことを伝えることができました。その友だちは今まであまり同

和問題の授業を受けてないようで、「人権委員って何？」っていうくらいの子でした。説明すると「なるほど、やっとわかったよ。ありがとう。」と言ってくれました。私が同和地区出身ということに対してのコメントは特になかったのですが、知らなかったことを理解してくれたのがうれしかったです。

私には、高校時代から付き合っている彼がいます。私は昨年度の愛南町での「人権ふぉーらむ」でフロアから彼とのことを語りました。それは、解放未来塾の指導者である愛南町教育委員会人権啓発室のMさんが、ご自身の体験された結婚差別について語られたからでした。

私は高校2年に彼と付き合い始めました。家が近くなのですが、彼は部落の人ではありません。人権委員をしていたので、同和問題に対して積極的に勉強している人です。彼は、私が同和地区出身だということは知っています。でも直接彼に自分の立場を話したことはありません。たぶん付き合い始めて、私の家がわかった時から知っていたのだらうと思います。

高校2年の「人権ふぉーらむ」で彼はフロアから発表しました。彼の親は同和地区の人に対して差別意識を持っていること。でも少しずつわかってもらえるように努力すると発言してくれました。

その発言を聞いて、「ちゃんと考えてくれているのだな」と思ったのと同時に、「やっぱりな」と思いました。彼の親は私のことをあまり良くは思っていないだろうなあとなんとなく感じていました。家が近所なのに、高校まで彼と出会ったことがないのは、彼は親から、あそこには行くなと言われていたからかもしれません。

彼はお母さん想いのいい人です。1人息子ということもあって、お母さんととても仲がいいと思います。お母さんと仲がいいっていうのは普通のことなのですが、仲がいいからこそ結婚の話が出た時にどうなってしまうのだらうと不安に思います。お母さんはたぶん反対するのだらうと思います。その時彼がどうするか。一緒に立ち向かってくれるのかとても不安です。

それは、同和問題について彼としっかり話をしたことがないからだだと思います。なら話せばいいじゃないかと思われるかもしれませんが、そう簡単に話せることはありません。どうやって伝えたらいいかわからないし、話したら彼は悩むと思います。彼につらい思いをさせたくない。でも、やっぱり差別に立ち向かうには話さなきゃという2つの思いが入り交じって、なかなか言うことができません。

でも、きっと彼はわかってくれると思うので、少しずつ話していこうと思います。親や先生や未来塾の仲間にも助けてもらいながら乗り越えていきたいと思っています。そして何年か後に皆さんにいいご報告ができればなと思います。今日は聞いてくださってありがとうございます。ごさいます。(拍手)

《コーディネーター A》

中学生時代も、高校生時代も、クラスの中に地区の仲間がいない。その中で、一番言いたくないけど一番わかって欲しいこと。そんな思いの中で彼女は揺れ続けました。

それぞれの町の実態は違います。子どもたちの現実も違います。その現実をしっかりと受け止めていく。そして、安心して誇りを持って、その心にあることを語っていける。そんな人間の間をつくっていく。クラスにいじめがあるのになににする関係ではなく。差別があるのになににする関係ではなく、「こんなことがある」「こんな切ないことがある」そんな思いを堂々と吐き出していける関係をつくっていききたい。

この後、板野中学校時代に、全体学習や人権劇でずっと仲間とつながっていき、その思いや願いを誇りとして、小学校の教師になったC君の思いを語ってもらいます。(パネリストのCさんに向かってニコニコしながら)大学を出て2年目か。

子どもたちとの出会いの中で揺れながら、教職の仕事をしている彼です。人権教育、同和教育というのは、まさに人間をつくっていく教育の営みです。彼の中に広がっていった人権教育の可能性。その思いや願いを

今から語ってもらいます。では、お願いします。いきましょう。(拍手)

《パネリスト C》

はじめに

失礼します。Cと申します。最初に少し自己紹介から始めさせていただきます。私は今、大阪の泉大津市というところにいます。

皆さん、岸和田という名前をご存知かと思いますがその近くです。小学校に勤め始めて2年目で、まだまだ新米ですが教師をしております。僕らが中学時代にお世話になったA先生から声をかけていただいて、ぜひということで参加させていただきました。つたない話になりますが、少しの時間お付き合いをお願いします。

私は、板野中学校の卒業生で、1年生、2年生の時にA先生がいらっしゃいました。そして、(フロアの端の方を指差しながら)あちらに座っていらっしゃいますY先生もいらっしゃいました。(フロアの男性に向かって)後々登場しますので、ちょっと待っていてくださいね。(会場全体に温かい空気が広がり、笑いが起こる)

A先生は板野中学校から職場を変われて、私も中学校を卒業して、高校、大学と進みました。再会したのが、私が大学にいた時です。「人権のフィールドワーク」ということで、A先生が大学の方に授業に来てくださいました。その時に再会を果たしまして、それから、こういう会に何度かお招きいただいています。

中学3年の時の活動

それでは、本題の方に移りたいと思います。自分でテーマを設定してみたんですが、「つながり」ということをもとに私の話をさせていただきます。主に中学3年生の時の活動について話させていただきますが、昨日、当時の記憶を搾り出したんですが、8年ほど前になりますのでなかなか思い出せなくて、(一冊の古いノートを取り出しながら)当時私が使っておりました「生活ノート」というのがあります。

これは日記みたいなものですが、受験生でありましたので、悩みなどを書いて担任の先生に返事をもらったりとか、日々の出来事を書いて担任の先生とやり取りをするということで一年間取り組んだことを思い出します。

その「生活ノート」を中心に、学級担任の先生が学級通信を作ってくださいました。それが今日持ってきましたこのノートに残っていますが、ここに、3年生の時に一年間取り組んだ「人権問題・同和問題学習」の内容が入っていますので、ここから記憶を掘り起こして話をしたいと思います。

「同和問題・人権意見作文発表会」3名の作文紹介

まず、「同和問題・人権意見作文発表会」というのをクラスでしたことがあります。それはテーマとすると、「何で今でも差別が残っているのか」とか、「これから私たちはどうすればいいのか」ということを中心に作文に書いて、クラスで発表をしました。ちょっと私のものも含めて3名の作文を紹介したいと思います。まず1人目です。

作文①「差別意識について」

私は、差別意識があるから差別があると思います。みんな、何で差別意識があったのだろうと思いました。自分の中にも差別意識があると思うけど、自分の中の差別意識を一番なくして、段々とみんなの差別意識をなくしていきたいです。

昔の人はいろいろな苦勞をしてきたと思います。例えば、食べ物とか、生活とか、環境とか。道の狭いことで悩みもあったと思います。昔は、部落というだけでのけ者にされたり嫌がられたりして、人間としての誇りを持たせてくれなかったのです。

今では、昔と違って少なくなったけど、まだ少しはあると思います。身体障がい者を見て、「あの人、やばいなあ」とか言うのも差別だと思います。そういうものを身の回りからなくしていきたいと思います。

私が、部落差別のことを知ったのは、小学校低学年の頃だと思います。2年生から学習会に行き始めて、「何で行きよるんだらう」と思い出したんです。行きながら段々そう思い出したので、学専(学習会専任指導員)の先生に聞いたのです。聞いた最初は何も思わなかったけど、学年が上がるに連れて、みんなで力を合わせて頑張っていきたいと思ってきたのです。

口だけでは何とでも言えるけど、実際動こうとしても、みんなの力がなくて動けないと思いました。なくすためには、学習会や中学生集会にも参加して頑張っていきたいです。部落内の子だけが頑張るのではなくて、部落外の人たちも一緒に頑張るってなくしていきたいと思いました。

次、二人目です。

作文②「今の自分の気持ち」

私は部落差別のことはあまり知りません。小学生の時から勉強してきたけど、まじめに部落差別のことを考え始めたのは中学2年生の時からです。

中学1年生の時は、体育館での「全体学習」にしても、教室での勉強にしても、ただ単に聞いているだけで何も考えないまま時間だけが過ぎていってしまいました。「私が先生の質問に答えなくても、他に答えてくれる人がおる」そんな気持ちがどこかにありました。

中学2年生になった時に、先生が、「誰かが言ってくれると思えば、身の回りの差別もなくならん。」と言っていました。その日、勇気を出して発表してみると、みんなが自分の言葉で返事を返してくれました。心の中に自分の気持ちをしまっただけではだめなんだと思いました。みんなに自分の気持ちを知ってもらって、別の人の気持ちも知って、みんなが一つの心を持って一歩でも前に進んで、差別をなくしていきたいと思いました。

私は自分では差別などしてないと思っていました。でも、よく考えてみたら、気がついていないだけで人を傷つけていました。身体の不自由な人を見て「何、あの人」っていつも思っていました。これは明らかに差別だし、人を傷つけることでもありました。

自分の生活の中で普通に話している言葉の中には、差別の言葉がたくさんあると思います。まず、自分のことから少しずつなくして行って、他人にも言えるようにしていきたいです。

この前、50人くらいの人の前で部落宣言をした人がいます。自分のことを堂々とみんなの前でアピールできるなんてすごいなと思いました。その子の学校には「学習会」がありません。誰が地区の子なのかもわからないと言っていました。その中でよく言えるなあと思いました。

私も高校に入ると、みんなと話したりすることも少なくなると思うから、今、自分の気持ちをみんなに知ってもらうことができてよかったです。

初めは「ひとごと」だと思っていたと思います。「誰かが発表してくれる」「自分が言わなくても誰かが言ってくれる」人任せなところがあったのですが、勇気を持って発言すると、みんなが返してくれたということ、それが、僕たちが3年間積み重ねてやってきた全体学習の良さかなと思っています。

3つ目、(照れくさそうに)つたない文章ですが、私の中学生時代に書いたものです。下手くそですが、そ

のまま読みます。

作文③ Cさんの作文

僕は、何の不自由もなく中学生生活を送っている人がいる中で、今も残されている差別と必死で闘いながら生活している人たちがいる。そんな人たちを僕は今まで見過ごしにしてきた。それは部落問題に対する意識が薄いからだろう。心の中に「自分には関係ない」という意識があったのだと思う。

今まで部落問題学習をしてきて、部落の人たちがどんな差別を受けてきたのかは勉強してきた。自分ではその人たちの苦しみはわかっているつもりだった。でも、実際に自分が身を持って体験しないと本当の苦しみはわからないのだろう。だから、私の心の中は、部落問題に対する意識が薄い。とは言っても、「そんな苦しい体験はしたくない」これはみんな思うことだろう。

でも、この状況を作り出しているのは僕たち自身なんだ。そのことを考えてこれから生活していこうと思う。今まで部落問題学習をする度に「差別がなくなったらいいのになあ」と思ってきた。でも、それより前には進めなかった。その差別がなくなったらいいとだけ思って、なくそうとする努力をしなかった。だから、これからは差別がなくなるように努力をしていきたいと思うけど、どんな努力をしたらいいのか、自分に何ができるのかがわからない。

それをこれからの部落問題学習をしていく上で見つけていこうと思う。そのためにも、部落問題学習を増やして、差別に対するたくさんの知識を身につける必要があると思う。そうすれば、少しずつでも差別されてきた人たちの苦しみがわかってくるはずだろう。そして自分にできることが見つかるだろう。

また、差別意識は心の中にあると思う。みんな同じ人間だとしてもそれぞれ違うものをたくさん持っている。だから、差別意識を表に出している人だけではなく、差別をしている人の数は決して少なくないはずだ。それなら、なぜ差別は残されているのか。それは差別に対して間違っただけの考えを持った人がたくさんいるからだろう。正しい考えを持った人も、その人たちに圧倒されてどうすることもできなかったのかもしれない。

でも、そのままでは差別はなくなることはない。差別している人は心の中が穢れてくる。そんな心の穢れた人間を増やさないためにも、それは間違いだと気づかせてあげる人が必要だ。また、その人になるのは僕たちなんだと思う。

小学校から部落問題を学習してきたこの数年間で、少しずつではあるがこれからの自分のやることがわかってきたように感じる。これからも部落問題学習を通して、差別解消への自分の果たしていく役目を探し続けていこうと思う。

口では大きいことを言っていたんですね。それが後々もっと大ききなところに気づかされることになるんですけど…。それから、もう1つ。この発表を終えての感想というのがあります。この意見発表会では、みんな一人一人が発表して、それにつなげて周りから意見を出すという形式だったんですが、ある1人の同級生の生活ノートの中の感想です。

同級生の生活ノート(感想)

今日、人権作文を発表した。でも、一つ思ったことがありました。みんな一人一人の気持ちを持っているなと思いました。やはり自分の考えと他人の考えとは同じではない。みんなが言い合って、他人の気持ちも知って、少しずつ力を合わせて運動していきたいと思った。

私は1年生のときに同じクラスだった子に、「性格変わったな」と言われました。「明るくなったな」と言われました。「いつ見ても楽しそう。悩みやないん違う」とも言われました。「今の方が良い」と言ってくれました。

この子らとの中で、みんなと一年間がんばっていきたいです。

この全体学習で一人一人発言する子がおって、周りの人が一年通して比べて「明るくなった」と声をかけてくれるといううれしい体験があったということで、なかなか勇気がいることなんですが、やっぱり自分から心を開いて打ち明けていくということで、この子自身も、明るくなったのではないかなと感じています。もう1つ、感想を紹介します。

(感想)

みんなの作文を聞いて、みんなちゃんと考えているんだと思った。私は考えて書いたと思ったけど、みんなの感想を聞いて、私はあまり考えていないなと思った。先生が発表した後に「スッキリした?そうでなかった?」と聞いたけど、スッキリしたという人が二人いて、スッキリした人がいるんだなと思った。

でも、なんだかみんなの作文を聞いて納得できた。私はどちらかというときスッキリしなかった方でした。まあ、適当でもいいかと思いがらいるところもあった。2枚半の作文を書けと言われていましたので、家で作文を書いていたとき、いらぬ紙を出して、文字数を数えて後どれくらいか計算をして書いての繰り返しで文字数がいけるようになってやっと作文用紙に書いた。

後で読んだら、なくてもよかったものがいくつかありました。でも、それで行を稼いでいた。

こんなふうを書いてくれた人がありました。これが、「ひとごと」という意識がまだあったということなんですが、全体の発表を聞いて、みんなしっかり考えているなあ、自分の思いをちゃんと伝えているなということがわかって、自分が「ひとごと」だったと気づけたということだと思います。

こういう体験を3年間繰り返してきまして、私自身もそうですが、クラス、学年全体を見ても、どんどん、自分の意見を言えるように変わってきたんだと思います。

もう1つ、全体学習を終えた後の私の感想です。

全体学習後の私の感想

先生の出す質問に対してなかなか手が挙がらなかった。僕は3番目くらいに手を挙げようかなと思っていた。でも、誰も手が挙がらなかったので一番に言うことにした。その後、何人か続いたけど途切れてしまった。時間が経つにつれて段々意見が出るようになった。

終わった後の感想は、自分としては意見が言えたので後悔はしていない。全体の意見は少ないようだったが、いい授業だったと思う。もう学年の全体学習は終わりなので、これからは教室の授業の方でみんながつながっていかれたらと思う。

何となくではありますが、当時から「つながり」ということを意識していたのかもしれないと感じました。まあ、最初は3番目くらいでいいかなという気持ちでいて、今で言うたら「ひとごと」だったと思います。

意見が出なかったから、結果的に1番目に言ったんですが、誰か発言する人がいれば、私は3番目に発言していただけないかなと思います。私の中で意識が薄いということが、今当時を振り返ってみてわかりました。これでもまだ私は「ひとごと」と考えていました。偉そうなことは言っていたんですが、まだ「ひとごと」でした。

「ひとごと」から「わがこと」へと変わった中学3年生の時の人権劇 ～劇の内容と私～

それが、「わがこと」になるきっかけというのが、3年生の時にした「人権劇」です。これは、校内の文

化祭の時にやったんですが、最初にいきさつを話させていただきますと、人権部の中で人権劇をやろうとなったんですが、当時の顧問が、初めに少し触れたY先生ですが、「人権劇の配役がたりないから、主役をやってくれないか」とY先生から言われました。

当時、私は生徒会長をしております、文化祭の用意があつてかなり忙しいんですよ。それで、文化祭の用意をしていたんですが、最初は、「ただでさえ仕事忙しいのに、よおこの人頼むわ。(会場に笑い)そんなことわかっているはずや。何年も先生やっていて、生徒会長大変なのは。(会場のYさんに向かって、笑顔いっぱい)わかっていましたよね。(会場内爆笑)

でも、いろんな方から、「こんなことは誰でも経験できることではないから」と言われて、生徒会長と副会長の2人で、参加させていただくことになりました。とても短い時間の中で、生徒思いとは言えない台本の長さだったんですが、頑張つて覚えました。

ちょうどシドニーオリンピックの開会式をやっていた頃だったと思います。地元のテレビ局に行って、よく遅くまで録音していたのを覚えています。

肝心なその内容なんですが、大学生という設定です。私はCと言うんですが、Y先生の今おられる応神中学校の人たちは人権劇を知っていますか？劇に出てくる「C」というのは、実は私なんです。この人権劇の中で、僕の名前がそのまま使われていたのでびっくりしたんですが、この劇は今もレベルアップして続いています。

この「C」と、もう1人「山本」という大学生の2人が、海の日にバイトをしに行くという設定です。その時に一緒にバイトに来ていた「恵子」と「沙織」という人に出会います。私「C」は、そのバイトに来ていた1人「恵子」に思いを寄せることになるんですが、そこで私が恵子に頑張つて告白します。すると、恵子からちょっと分が悪そうに「実は、部落出身なんです。私。」と言われるんです。それで私はびっくりします。

どうしたらわからなくなつて、山本に相談しますと、その山本からも一言。「実は、俺もそうなんよ。」ということで、ずっと部落出身ということで苦しんで来たということをそこで伝えられる。

そこで、「どうしよう」というところで劇は終わるんですが、その続きはY先生に聞いていただいたらわかると思うんですが、そういう設定です。ここで、私は自分の中ですごい葛藤が起きました。この人権劇の中では、C青年は「部落差別なんか自分には関係ない」という思いがあつて、初めて恵子から、山本から聞いて、「わがこと」になったんだと思います。

劇の相手役になった子への私の気持ちからの気づき

自分に降りかかってきたというか、自分にも考える機会ができたということで、「わがこと」になったと思うんですが、私自身の「わがこと」になったことというのがあります。それは、この劇をするにあたって、相手役の女の子はクラスでいじめの対称になるような子でした。たまたまそういう場面もクラスではあったんですが、そこで私が相手役を務めることになったんですが、当然僕も周りの目をすごく気にしたんですね

口では、全体学習で「差別はあかん」とか言っていたんですが、そこで僕は「ひとごと」だったと気づきました。いじめの対象になっている子と人権劇の相手役になった時に、自分が何て思われるんやろなと思った自分に腹が立ちました。その時に、初めて「わがこと」になったんですね。「ひとごと」やと思っていた自分に気づきました。

そして、「僕は人権劇をやるよと決めたとし、周りを気にしても仕方ない。頑張つてやろう」と思つてやったんですけど、劇が終わった後でクラスみんなが感想を言ってくれました。いくつか紹介したいと思います。

感想①

「すごいなあと思った。水準の高いところ、役者さんはお上手で「C」は、これからどうするんでしょう。そのまま恵子のことを好きでいて、部落差別を乗り越えていくのか。それとも、恵子のことをあきらめるのか。その後が聞きたいところです。」

感想②

「自分のもし好きになった人が部落の出身とわかったら、今までとこれからと接する態度が違うという人があったけど、そんなのは嫌だなと思いました。哀れみというのは最悪だと思いました。本当にこういうことがあるのかなと思います。」

感想③

「劇を見て、私はああいう場面に出会ったら、多分、言おうか言うまいかと迷って言えないと思う。だって言ったら、彼とか好きな人にどう思われるか。嫌われるんじゃないかと思うからです。」

「差別の話だったけど、「C君」の部落に対する思いももっと言って欲しかった。「山本君」と「恵子さん」がかわいそうだ。「山本君」ずっと今まで本当の友だちだと思っていたのに、「C君」は全然応えてくれない。今まで、「C君」を信じてきて相談も乗ってもらっていたのに、何か、私だったら信じられなくなる。まだまだ次があるとしても、中学3年の私たちには、夢があったり挑戦があったりということまで見たかった。」

感想④

「今までの人権劇は堅苦しかったけど、涙はないけどおもしろくて、部落の嫌なイメージのようなものが少し消えた。最後の方は、何か中途半端な終わり方でよくわからなかったけど、今までよりは全然良かった。いつの間にこんな練習をしたのか、とにかく良かったと思います。」

感想⑤

「みんなよく演じていました。「恵子さん」が部落出身だということだけで、「C君」を好きだという気持ちを抑えているところがとても辛くなりました。「C君」が部落のことをひとごとだと思っていたのは自分と同じだと思いました。」

感想⑥

「この劇を見て思ったことは、部落問題について勉強してきても、全てを理解するにはこれからも勉強の必要があるのだと思った。」

というような感想があったので、これを見た時に、まずは自分からというのはずっと思っていたんですが、1番目に発言することだとか、積極的にこういう人権劇に参加することで、周りが変わってくるのかなと思っていたら、実際に感じてくれていたということがわかったので、やっぱり自分のやったことは間違いなかったんじゃないかなと思いました。

人権劇をするようになった時に、「どうしようかな。周りからどう思われるかな。」と思っていた自分があほらしくなりました。これが、私の「ひとごと」から「わがこと」に変わった瞬間でした。3年間全体学習をやってきたんですが、3年生になった終わりの11月頃、はじめてそこで「わがこと」になった瞬間でした。

でも、1年生からずっと学習を積み重ねてきたことが、今の私の礎となっていると思います。この全体学習のように、体育館に集まって、全クラスで1つのことに向けてみんなで取り組むという、このつながって

いくということが、「ひとごと」から「わがこと」へということへのきっかけになるのではないかなと思っています。

大学に入って…

ちょっと話はそれるんですが、私は大学時代に初めて、いろんな県外の人たちと一緒にあって、人権のことを話す機会があったんですが、自分は小学生からずっと勉強してきたんですが、他のところから来た子の中には、「そんな言葉も全く知りません」という人のいることを初めて知って、すごいショックを受けたというか、これだけ学習をしてきた僕らと、反面、そんな言葉も20年間聞いたこともない人がいるという現実を見て、ショックを受けました。

今、私は大阪で教員をしているんですが、中には、『人権・人権』『部落・部落』と言うから差別がなくならん」という「寝た子を起すな」ということだと思いうんですが、「そのことを話すから刺激してしまうんだ」とか、「知らないままいったらよかったのに、そんなことを言うからまた差別がおきおるんだ」という方もいらっしゃいます。

でも、自分が差別をしていることに気づかないから残っているんだと思うんですね。気づいていたら絶対やっていないし、今でも、私も相手が傷つくということを感じないでやっていることもあります。それに気づききっかけというのは、こういう全体学習などの中にあると思います。

自分自身を見つめ直すというか、自分をさらけ出すような、自分の嫌なことを表現できるような機会というものはいらっしゃるので、私も、中学時代、A先生やY先生から教わったことを、今、子どもたちに返していければなと思っています。長々とお静聴ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

最初にBさんが彼のことを語ってくれた姿。地区外という立場で、その思いを語ったC君の姿。立場が違うとこんなに表情も違うし、思いも違う。

この現実を私たちは、きちんと捉えたいと思うんです。8月9日の中学集会の中で、同和地区出身の中学生が、切々と語っていく中、地区のない学校の子どもたち、まったく当事者がいない学校の子どもたちが捉えていく同和問題の認識は全く違います。

ある男の子はこう言いました。「僕は部落差別がなくなることを願っています。」同和地区の中学生にとっては、この「願っている」という言葉がどうしても許せない。その「ひとごと」の言葉が、その言葉が心に突き刺さってくる。

見ようとしなければ見えない。深く学ぼうとしなければ気づかない。そういう私たちの感性を磨いていくためにこの場があると思うんです。「全体学習」という言葉が出てきました。昨年も、一昨年も、この場でやったフォーラムが「全体学習」なんです。

中学生、高校生、大学生、さまざまな年代の人が、様々な思いを語っていく。その語りが語りを生んでいく。その語りが語りを生んでいく中で、一人一人が一人一人を啓発していく。気づきの中で、目覚めの中で、生きる力が湧いてきます。

今から、部落差別の中を揺れて揺れてしながら生き抜いてきたDさん。すごく、…若いんですけど、高校生の娘さんがいます。Dさん、そうは見えませんね。(会場内、笑い)お願いします。(拍手)

《パネリスト D》

はじめに

(立ち上がって、マイクを持ち、壇上のテーブルの前に立ちながら、ニコニコと元気よく)皆さん、こんにちは!(拍手)座ってしゃべることが苦手なので、たっってお話をさせていただきます。「若いんですけど」というA先生の言葉が、すごく無理をしているような気になりませんか?!(笑い)本当にメチャクチャ若作りをしています、Dと申します。米子から来ました。米子ってご存知ですか?(前の席の何人かに)知ってる?知らない?全然知らない?境港って知ってる?鬼太郎ロードがある所なんだけど?ちょっと覚えといてな。境港は「ゲゲゲの鬼太郎」で有名になりました。米子は、その手前の境港より大きな町です。そこが米子です。

生い立ち

私は、今、2人の立場を聞きながら、では、私の語ることは何だろうと考えてみました。皆さん、大山ってご存知でしょうか。(前の席の学生に)大山って知ってる?(学生がうなずく。その姿にホッとしたように)ああ良かった。知らなかったら、私帰ろうかと思いました。(笑い)

私は、大山のふもとの被差別部落で生まれました。被差別部落出身の父と、被差別部落出身の母を持つ、こてこての部落の子として生まれました。なぜこんな言い方をするかというと、私たちの同級生の中では、地区外から嫁いで来られる方も少しずつですが増えていた時代で、なんとなく、ふるさと(里帰り)が地区外にあることが少しうらやましいような思いを持っていました。同和教育がスタートした頃の年代なので、決してプラスの同和教育ではなかったけど、みんなが一生懸命部落問題を捉えようとする、前向きで一番好きな学習でした。

その中で、私たちは一生懸命学習会に通いながら、同和教育を学校で真剣に学び仲間と共に歩んできました。

私が被差別部落出身だと知ったのは小学校5年生の時でした。同級生のKさんという、徳島では「しょうから」と言ってもわかりませんね。メチャクチャやんちゃな男の子に、「どこが被差別部落か知っとるか?」と言われて、初めて自分の立場を知りました。「えっ?!何で道1本隔てて、自分の村が被差別部落と言われないけんのか。差別をされる立場にならなければいけないのだろう」という複雑な思いの中で学習会に通い、学校では当たり前のこととして立場宣言をしていました。

そして、中学生になります。同和地区の子を中心にさまざまな立場の子ども達と共に本気でぶつかり合っ、本気で語り合い、本気でケンカをし、そんな中で中学時代を過ごしました。そして高校に行くのですが、今日はスーッと話していますが、本来ですと、ここは20分位かけて話をするところですから。(明るく元気な語りに会場内に笑いが起こる。Dさんは、壇上で動き回りながら、身振り手振りを交え生き生きと語り続ける)でも、今日は時間がないのでさらっとここは流します。

そして、米子市内の高校へ進学します。中学までの私は同級生が本当に良かったので、わからないことは「わからない」と聞け、変だと思ふことへは「おかしい」と言え、堂々と立場を語り、ふるさとを語ってきました。本当にいい仲間との出逢いや、一生懸命向き合ってくれる先生方とのいい出逢いがありました。だから私は、同級生は絶対差別をしないと決めてきました。差別が今あるのは、おじいちゃんやおばあちゃんや、変な考えを持った大人がいるからだと思っていました。毎日が同和教育そのものでした。とてもいい環境だったので、純粋にそういうふうには思っていました。

高校入学 1週間後の出来事 ～高校で出会った部落差別事象 ①～

高校に入学しまだ1週間しかたっていない時のことです。同級生にこんな発言をされました。

私の通っていた高校は、米子市内を中心に、県東部、中部、西部と県内外のあちこちから生徒が集まって

きます。全校生徒1200人の学校でした。同級生のある女の子が、「D、ちょっと来いや」と言いました。「何？」と言いながら廊下に出たんですね。すると、その女の子は、廊下の端にいたある女の子を指差して、「あの子、同和(地区)の子だから気いつけや。」って言いました。

「エッ?!」と思いましたね。高校1年生ですよ。皆さん。私の生まれ育った町では、そんなことを言う同級生など、1人もいませんでした。真剣に、自分のこととして、部落問題を一緒に語り悩んでくれる仲間がそこにはいました。ところが中学を卒業して高校生になった途端、一週間もしないうちに、「あの子、同和だけ気いつけや」という、この言葉にもものすごいショックを受けました。

中学までは、「それっておかしいでしょ！」ということが言えていました。しかし、高校生になった途端、その一言が私には言えませんでした。「1200人の中のたった1人かも知れない。」そう思ったら、その子の人権感覚の違いと、1200人の中の1人かもしれないという孤独感から、言えない私がそこにはいました。その後も、この高校ではまだまだ差別事象が続いていきます。

高校で出会った部落差別事象 ②

私を含め仲のいい女の子5人のグループがあったんですね。今は携帯電話でメールのやり取りをしますが、その頃はメールなんて有りませんから、退屈な授業のときには手紙のやり取りをよくしていたんです。当時の同和教育はつまらなかったんです。体育館に暗幕を引いて、昔ながらの映画を観て感想を書くという、本当につまらないものだったんです。

ある日のLHRのプリントに仲のいい女の子2人が書いたものが私のカバンに間違っ入っていたことがありました。そのプリントには、こんな風にかかれていました。「私は、米子市〇〇町4丁目だけど、部落じゃないよ」「ハア〜?」と思いました。

続けて何と書かれていたかという、「私は今日、家に帰ってお父さんに『もし、私が部落の人と結婚するって言ったらお父さんどうする?』って聞いた」というんです。このお父さんに聞いた子は、滅茶苦茶お父さん子で、ものすごいお父さん大好きです。お父さんはその子になんて答えたかという、「殺したる」と言ったと書いたんです。誰を殺すんでしょうか。

皆さん。これにはこの後があるんですが、私は部落の青年を殺すのかと思ったんです。なのに、かわいくて、かわいくて仕方のない我が子を、部落の人間と結婚すると言ったら殺してやると書かれたんです。部落差別って怖いと思いましたね。我が子を殺さなければならぬほどの部落差別って何だろうと思いました。しかし、差別発言はまだ続きます。

高校で出会った差別発言

隣のクラスに、M君という無茶苦茶カッコイイと言われる男の子がいたんです。休憩時間になると女の子がキャーキャー集まってきます。ある時、M君に対してこんなうわさが立ちはじめました。わけのわからないうわさでした。すごくローカルになるんですが、「M君は、山陰放送(テレビ局の名前)のアナウンサーの息子らしいよ。だから、M君はカッコイイんだ」といううわさが立ち始めました。

これはウソか本当か知らない、全くくだらないうわさなんですが、皆さん、本当にね、米子にきたら山陰放送テレビをつけてみてください。フジテレビに出ているようなカッコイイお兄ちゃんいませんよ。(笑い)正直言って、やっぱり山陰放送だなというようなお兄ちゃんですよ。(前の女性に同意を求めるように)ねえ、佐伯さん、思うでしょう。(声をかけられた前の女性も笑いながらうなづく)

「山陰放送のアナウンサーの息子だからカッコイイ」とみんながうわさする中で、私の一番仲のいいT子が、ある日こんなことを言い出しました。「けどね、M君って部落みたいな顔をしてるよねえ?」「部落み

たいな顔って何？」と私は不思議に思いました。(熱が入り、段々と力が入りながら)

私ね、今でこそ化粧で若く見せようと一生懸命カバーしていますが、実は、私のふるさと大山町を歩いていると、父は岡田と言うんですけど、岡田の娘だとすぐわかるくらいそっくりなんです。ものすごくこの顔が嫌いだったんです。

今でこそ、堂々としていますけど、滅茶苦茶自分の顔にコンプレックスをもっていました。だから、「山陰放送のアナウンサーの息子だからカッコイイ」この表現。「だから、部落の人じゃないか」という感覚。「ねえねえ、ちょっと待って、ここに部落の人いるけど、部落の人だってカッコイイ人もいれば、そうじゃない人もいますよね。」そう私は言いたかったです。でもまだこの時も言えませんでした。親友のこのT子にさえ、「その考え方は変じゃないの！」と言えなかったんです。

高校での現実を村の仲間に話して

しかし、T子のこの発言にさすがに限界だと思いました。夜、ムラの仲間にこの発言とプリントのことを話しました。みんな仲がいいのですぐに集まってくれます。「ちょっと一、今日こんなことがあったんだけど。」と言うと、村の仲間から、「何でだまっとるだ。今までおまえはおかしいと言ってきたが。」とすごくみんなに言われたんですね。

もう1人同じ高校に行っていた幼なじみがいたので、「だって、部落の人間は1200人の中の2人かもしれんで。言えるか？」と言ったんですね。「何言っとるだ。おまえには私ら(ムラの仲間)がついとるがな。」米子弁でわからないかもしれませんね。ムラの仲間がこう言ってくれました。

職員室で状況を語ったことで広がった取り組み

それで、次の日に、私は職員室に怒鳴り込みます。いつも叱られてばかりいる職員室に、これぞとばかりに教頭先生の机の前で、担任の先生に、「うちの同和教育(人権教育)がおかしいけん、私たちはこんなことを書かれたり、こんな発言をされんといけんのだわ！！」とくっつかかったことを覚えています。これが西部地区初の高校の糾弾会となりました。次の日、「私が部落出身だということ、あなたの考えが間違っていること、これからもずっと親友でいたいから一緒に勉強してほしいこと」などをT子に伝えました。この後、T子と一緒に集会に参加したり学習をしてくれました。

この時の行動が、後々、(10年経って)わかったことですが、鳥取県の西部地区を初めとした高校の同和教育のあり方を見直すきっかけとなったそうです。

高校卒業後の自分の変化

卒業後、社会に出ていろんな問題にぶち当たってきます。しかし、そこでも、堂々と言っていた自分が言えなくなるということが度々ありました。私は途中でこんなふうになってしまったんです。「どうせ部落に生まれたんだから仕方がない。これも私の人生だ。差別発言を受けても、言えない時もある。」いちいちね返すのが面倒くさくなるというか、常に闘い続けることが嫌になった自分がありました。そんなことを思いながらも、絶対差別をなくしたいという思いだけはずっと持っていました。

しかし、言えない現実が次々と起こるわけです。その中で、私は今の連れ合いと結婚します。連れ合いは被差別部落出身の人ではないんですね。実は、今、地区外に住んでいます。部落が嫌で出たわけではないです。連れ合いと結婚する時に犬が飼えるアパートを探したんですね。それでたまたま住んだ所が地区を有していない中学校区だったんです。

私には高校2年生と高校3年生の娘がいます。高校3年生の娘を産んだ時に、私はこの娘との出逢いによ

って気付かされました。

今日一番みんな(子ども達)に伝えたいことは、みんな、どうでしょうか。自分の名前の由来とか、生まれた時の体重とか、知っていますか？(最前列の中学生に向かって笑顔で)わかる？言える？(前から「名前の由来ですか？はい。」恥ずかしそうに答える中学生に、明るく元気に)皆さんに紹介しちゃいます？言ってみる？みんなの前で。じゃあ、言っちゃおうか。立ってみんなの方を向いて言おうか。(促され、ゆっくり立ち上がり会場を向いて語り始める)

《フロア 中学生》

私の名前は翔子で、何で「翔子」っていう名前かということなんですけど、名前の漢字は「羊」みたいな字に「羽」を書いて、子どもの「子」をつけて翔子で、未来に羽ばたくような子になって欲しいという意味で名付けられたとお母さんから聞きました。(着席する)

《パネリスト D》

はい。ありがとうございます。(会場から拍手)それぞれのみんなの命にも、名前にもたくさんの願いや思いが込められていると思います。

子どもが生まれて 差別されていい命なんてない！ ～天使が舞い降りてきた～

私は上の子を身ごもった時に、全然関係ないんですが、私は3月23日生まれなんです。出産予定日が3月18日だったんです。3月22日の夜中の12時にお腹が痛くなって、産婦人科に駆け込んだんですね。

実は、私は5人兄弟の4番目で、簡単にぽこっと産まれているんですね。昔、近所のばあちゃんや、うちのばあちゃんから「かおりちゃん、お産はねえ、女の子はお母さんに似るんだよ。」と聞かされていました。ということは、私も5分ほどでポコッと簡単に産まれると思っていたんです。

単純ですよ。すると、入院した3月22日の夜中から、ずっとうなされて、5分経っても10分経っても出てこないわけです。私が「先生！おなかが痛いです！！」と言うと、医師はゆっくりと「お母さん。赤ちゃんはね、もっと大変だから……。まだまだだからね。」と言って帰っていくんですね。その繰り返して、段々疲れてくるでしょう。汗は出るわ。おなかは痛いわ。腰は痛いわ。ご飯は食べれないわで、「5分じゃない」と思いながら、一日が過ぎていきます。3月23日の夜8時くらいになった時に、最後の手段だと思って、「先生、私今日が誕生日なんです。子どもが同じ誕生日だったらうれしいと思いませんか？」(会場から笑い)そう言うと、先生が(同じようにゆったりと)「お母さん。まだまだだけんね。」(会場爆笑)3月24日の朝8時過ぎに、第一子が丸2日間かかって誕生するわけですよ。

オギャアッて産まれたわが子を見た時に、えらくて感動の涙はなかったですね。涙はなかったけど、今日は上の子は来ていないので言いますが、親ばかりですよ。滅茶苦茶かわいかったんです。まるで天使が舞い降りてきたと思ったんです。髪はふさふさ。色は真っ白。3300kgの女の子が産まれたんですね。

(米子市から来た仲間の方を見ながら)ねえ、知ってる人は知ってる。(笑い)私は、その時に初めて思いました。皆さん、どうでしょう。そういう中で生まれた大事な大事な命です。(語る声に力が入る)

私は、この時に初めて、「差別されていい命」とか、「いじめられていい命」なんてこの世に一つもないと思いました。私は、「部落に生まれたから仕方がない」と思っていた自分がいました。しかしね、みんなが、愛されて必要とされて生まれてきた大切な命です。誰一人、誰一人です。今日この会場に来ている全ての皆さんもです。「差別されていい命」、「いじめられていい命」はないと、私は思っています。

私の友だちにこんな人がいます。子どもが生まれて一歳で、DV(ドメスティックバイオレンス)か何かか

あって離婚したんですね。お母さんが一生懸命女手一つで女の子を育てたんです。このお母さん、子どもが小学校5年生の時に再婚するわけです。再婚した男性にも男の子が1人いました。当時小学校3年生でした。「今まで頑張って来てよかったね」と言うと、彼女は、「うん、今まで頑張ってきてよかった。とてもやさしい人なんだ。」と笑顔一杯に伝えてくれていました。

そして、1年後、彼女に出会った時に、「なんか太ったね」と言うと、彼女は微笑みながらこう言いました。「あのね、今、新しい命がおなかの中に宿ってるのよ」と。「若くない(高齢出産)んだから気をつけてよ」と言って別れたんです。それから数ヵ月後、彼女は出血をして入院するんです。大切な大切なお腹の赤ちゃんが流れて出ないように。彼女は米子市内の大きな病院に入院します。クリスマスの頃、彼女は出産をします。彼女そっくりな男の子でした。オギャア！！と泣いたそのわが子を抱き上げて彼女はニコッと微笑んだそうです。ニコッと微笑んだその瞬間に、彼女は出血多量で30何歳という若い命を終えていきました。我が子の命と引き換えにそのお母さんは亡くなっていきました。

(中学生、高校生達に向かって力強く)あなた達の命は、そういう中で生まれてきた大事な大事な宝の命だと私は思っています。誰一人！誰一人！「差別されていい命」や、「いじめられていい命」などないと私は思います！そういう命がけで生まれてきた命を輝いて生きていこう。自分を大事にして生きていこう。私は、自分の出産と彼女の命がけの出産によって命の尊さを教えられました。

ちなみに私は、翌年の3月29日に2人目の子を産みました。可愛い子が産まれると信じて産んだんです！そしたら・・・うちのお兄ちゃんそっくりの熊さんみたいな顔でした。(会場爆笑)目が脹れて、真っ赤になって。「ワアッ！！お兄ちゃんが出てきた！」(会場爆笑)と思いました。

しかしですね、後で我が子を見てくださいね。後方にいますから。(会場中振り返る)それから我が子はすくすくと育ち、たくさんの仲間や全国の皆さんとの出逢いや応援のおかげで、心のやさしい子に育ってくれました。笑顔がとてもかわいいとよく褒められます。(笑)

子育ての中で ～部落外で出会った差別発言～

私はこの子たちを育てる中で、気をつけたことは、さっきお話したように、私は地区外で子育てをしているわけです。ですから、部落出身だということをこの子たちに伝えようかどうしようかということ、この子らを産んだ後の一週間で悩むんです。

なぜかという、あまりにも我が子がかわいすぎて、これまで怖くなかった差別が怖くなったんです。もし、20年後に可愛い我が子に部落差別や結婚差別が襲いかかってきたらどうしようと、真剣に悩みました。

その時に思ったんです。「それなら、我が子を守るために、自分が部落出身だということを語らなければいいんじゃないか。隠して生きればいい。」ということです。なぜかという、地区を有していない地区外に住んでいるということは、本当に悲しい現実があって、部落がないから、人権教育・同和教育が進まなくても仕方がない。ここに部落の人が住んでいないのだから関係ない。

挙句の果てには、極めつけこんなことを言われる方があります。これは、借家とアパートを持っている方です。

「借家の子とは、うちのかわいい孫は遊ばされん。なぜかという、借家には、どんな馬の骨かわからん者が住んでいるから、借家の子とはうちのかわいい孫は遊ばされん。」思いませんか。それなら貸さなければいいんですよ。貸していながらそういうことを言う。腹が立ちませんか。「アパートに住んでいる子とだったら、遊ばせてもいい。なぜかという、医大に勤めている人の子や、学校の先生の子がこのアパートにはたくさんいるから遊ばせてもいい。」

人はどこまで差別をすれば気が済むんでしょうか。誰かを差別しなければ生きていけないのでしょうか。

差別の厳しい現実に、この明るい私が、家の障子さえも開けられなくなってしまったんです。でも、この顔は災いするんですね。どこへ行っても、「あら、Dさん。高校時代汽車で一緒だったよ。大山町だったがよね。」などと、声をかけられるんですね。どうやらこの顔は目立つらしいです。

当時は、「この先、うちの子に、部落にルーツがあると伝えられるかどうかはわからないけれど、せめて差別をしない子を育てたい。自分に部落にルーツがあると知らずに自分自身を差別する子にはなってほしくない。」と私は思ったんです。家の近くに、社会福祉会の障がいのある子ども達も通っている保育園があったんです。そこで、障がいのある子ども達と一緒に過ごす中で、全ての人間はみな一緒だよということを当たり前のこととしてわかってほしかった。子ども達には「あのね、みんな同じ人間なんだよ。障がいがあるとかないとか、どこに生まれたかとか、そんなこと関係ないんだよ。みんな同じ人間なんだよ。」ずっとずっとそんなふうに言って、子育てをしてきました。

鳥取西部大震災での差別発言 ～兄の勤務先の人からの差別発言… 行動を躊躇した私～

そういう中でも、またさまざまな差別発言を受けます。今から約9年前(2001.1.30)です。こんな事件に巻き込まれてしまいます。鳥取で、西部大震災というのがあったんですが、うちの兄が勤めている、ある大手の企業の方にこんな発言をされたんですね。

家の中の、ある箇所の修理を頼んで、見積もりに来てもらったんです。その時に、「もう少し安くして」という交渉をしました。そうしたらその営業マンが私にすごい顔をしてこんな発言をしました。「同和で借りいや！同和で！」それを聞いて「ハア～？」って言いました。「お金がないなら同和で借りればいいがな」と言ったんですね。「そんなお金がどこにあるか教えて欲しいわ。あんたらの偏見じゃないん！？間違った考え方じゃないん！？」と言い合いになるわけです。

黙っていても人まかせでもなくなる差別への気づき ～教育委員会人権政策課指導員になって～

しかし、うちの兄の同僚ですから、この会社に言っていくかどうかを悩んだんです。次の日に兄に呼ばれました。なぜかこのことが耳に入っていて、兄に、「なぜ黙っている。おかしいことはおかしいと言え！」と叱られ、次の日このことをその企業に言っていました。

そして、企業の取り組みを見直してもらうこととなりました。これがきっかけで、10年間黙っていた私は、黙っていても人まかせでは差別はなくなるなということに気づかされたんですね。

同和教育・人権教育は、いろんな方面で本当に広く取り込まれるようになりました。しかし、こんなふうにもろんなところで根強く残っている差別発言、皆さんが持っている差別意識。私は、これまで学習会で培った力や、思いや、友だちとやってきた人権教育・同和教育を、やっぱり、今もう1度、差別をなくすために自らが立ち上がっていかねばと思ひ、今の仕事を選びました。

そういう中で、さまざまな子ども達との出逢いがありました。今日も来ていますが、高校生との出逢いがあります。20年前私が高校時代に感じたものと同じ思いを持ち続けていました。

みんなが、人権教育・同和教育を「ひとごと」と感じているんですね。「人権教育・同和教育は散々やってきた。もういいわ。俺らには関係ない」そんな「ひとごと」の発言が、私が関わった同和地区出身の高校生を苦しめています。高校の中でなかなか人権教育が進んでいかない現実。それに直面した時に、「この子らともう1回共に歩いていこう」と思いました。

ある結婚差別の現実…24年目の変化 ～生まれてはじめて出会えたおじいちゃん、おばあちゃん～

結婚差別の現実の中にまだ生きている子どもたちとの出逢いがありました。ここにいるのに、いないこと

にされている子ども達がいます。この子のお母さんにとっては24年間の差別との闘いでした。この子にとっては18年間の闘いです。この子が高校友の会を今日も来ている子と一緒に引っ張ってってくれました。

この子が高校を卒業する年の夏休みの終わりに、隣保館にやって来てこんなことを言いました。「今日はみんなにうれしいお知らせがあるの。みんなに聞いて欲しい」って、自ら自分のことを話してくれました。普段はみんなの話を「うん。うん。そうだね。」って聞いているやさしい子で、常に笑顔を絶やさず西部の高校生のリーダー的存在でした。「生まれて初めておじいちゃん、おばあちゃんに出会ったの」と語ってくれました。恨み事一つ言いません。「おじいちゃんねえ、温かかった」なんでこの子らがこんな思いをしないといけないのでしょうか。この差別の現実ってなんでしょう。

皆さん。この後、この差別の現実をみんなできっかりと語っていけたらありがたいと思います。時間超過をしてしまいました。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

同和問題を生き生き語る親子の関係っていいなあと思いました。笑顔が本当にいいです。いっぱい思いが溢れました。限られた時間です。多くの方が、自分の言葉で自分を語る。こんな思いがあると、300人近くが集まっている場所で、はっきりと自分を伝えることを通して、私たちの世界が変わる。そんな学びの場を皆さんと創り上げたいと思います。

休憩を10分取らせてもらいます。身近な方と3人の語りについて語ってください。そして、それを受けて、後半は会場にマイクを回していきます。非常に窮屈な中、1時間半頑張ってくださいました。3人の語りを受け取り、思いを返していただければうれしいです。3人の方に拍手をしていただきたいと思います。(会場いっぱい拍手)それでは休憩に入ります。ありがとうございました。

前半終了

=意見交換=

《コーディネーター A》

一人一人の思いが会場全体に広がっていく。そんな時間を共有できたらと思います。『ひとごと』から『わがこと』へ」というテーマをずっと掲げてきました。聞くだけの研修会ではなくて、「私は何を返せるんだろう」「私は何を語れるんだろう」と自問自答しながら話を聞く。

私の家族の中にある現実。職場にある現実。人間関係の中で、揺れて揺れてしとる現実。切ない思いをかみしめて生きる現実。よろこびを持って生きる現実。私たちの生きる社会には、さまざまな人権の課題があります。「同和問題なんかにかかわってどうするか」ということは、頭ではわかっています。でも、利害が絡んだら、そう簡単にいきません。

私がかつて勤務した土成町の行政職員人権研修で、私と同年代の行政職員の方が、次のように語ってくれました。

「人権研修で先生の話聞いて、同和問題を段々『わがこと』して考えるようになりました。夫婦でもよく同和問題の話をするようになりました。娘が大阪の方の大学に行っています。彼ができて、いつも帰ってきたら彼の話をしてくれる。私たち夫婦は、娘の話聞く中で、『何年か先に結婚するって言ってきたら、あの子が大好きになった子、絶対に身元調査みたいなことはせんこうな。そして、もし仮に、彼が同和地区の青年であっても、そのことを誇りとして、よろこびとして、娘の結婚を夫婦で祝福していこう。』夫婦でそんな話をします。

でも、そう言いながら、その彼が近くの、隣の町の、同和地区の子だったら、いろんなしがらみがあって

心穏やかでない自分がいます。大阪や、神戸や、京都や、関東の方の、遠くの同和地区の子だったら、いくらでも頑張ってもやれると思う。でも、近くの同和地区の子だったらなかなかそうでない自分がここにいます。」

でも、そのことを伝え合うことを通して、やっぱり人間は、乗り越える力を自分の中に蓄えていくんだと思います。私の中にまだこんなこだわりがある。揺れる部分がある。頑張れると言えない自分もある。そんな自分を直視しながら、そんな自分を言葉にすることで、大きな自分をつくっていくことができるんだと思うんです。

そんな語り合いの時間を、今から皆さんと共有できたらなと思います。出来るだけ多くの皆さんの発言が会場に広がって、一人一人が一人一人を変えていく。学習者が学習者を変えていく。そんな学び合い、そんな語り合いが、広がっていったらうれしいと思います。

それでは、皆さんにマイクをまわしていきたいと思います。3人の思いを受けてこんな気持ちになった。こんな思いがある。そんなことを返してくれたらうれしいです。挙手してください。

(会場を見ながら、スッと手の挙がった最前列の女性に声をかける)じゃあ、お願いします。

《フロア S》

(マイクを受け取り立ち上がると、フロアを向いてフロア全体を見渡すように語り始める)すみません。鳥取県から来ました。私は、今日ここにパネリストとして来られたBさんと、愛南町で何度か出合いをさせていただきました。本当に、このBさんの、今の活動につながる後輩たちのいる姿にすごいなあと思います。Bさんは、今、愛南町にいる子どもたちの、ステキなモデルになっているんだろうと感じます。

そして、私はいつも思うんですが、同和地区に住んでいる人たちが、どうして「自分が同和地区出身だ」と語らなくてはならないんだろうか。語らせているものは何なのでしょう。

私は、同和地区外に住んでいて、この20年間、同和教育を続けてきて、いろんな人と出会って、同和地区の人たちといっぱい交流しながら思いを受け止めて、私は地区外にいるからこそ、地区外にいる人たちの心の解放を、自分の立場から伝えていこうと実践してきました。

けれど私は、いくら県外から大きなことが言えても、自分の地元で、鳥取県内で言えなければ何もならないと、先日、鳥取県の研究集会の中で同じことを一生懸命発信しました。地区外にいる私たちが、本当に一人を一人として認める。そういう仲間になりましょう。解放運動というのは、決して大きなことをすることだけではない。自分の隣にいる人に自分の思いを伝え合いながら、隣の人を仲間にする営みを一人一人から広げていく。そういう地道な運動こそが、大きなことになっていくのではないかと一生懸命語りました。

そういう語る姿、地元での姿に、私はいつも地元から、「地区外にいて、なぜこれほど一生懸命できるんだろう」と異質に思われています。同和地区の人たちからも、「なぜそこまでできるんですか」といつも不思議がられます。

私は、同和地区外にいて、いろんな思いを受け止めてきた今だからこそ、つながり合う中で、「頼むけな」と言いながらしっかり握られた、同和地区の人たちの温かい手と、それから、「言葉を選ばずに話ができる」と言って、本当にいろんな思いを伝えてくれた、その思いを受け止めた自分が、そのことを隣にいる人たちに伝えていかなければいけないなと思いながら、動く自分になることができました。

娘の結婚した時にも、「例えば相手が同和地区でも、私たち夫婦がきちんと対応していけばいいという覚悟だけしておけばいい」と夫婦で語り合えました。このことが一番の成果だなと思います。

それから、もう一つうれしかったことが、これまで私の義理の兄は、いつも、「俺は、部落の人間や同和問題は嫌いだ」と言っていました。でも、昨年頃からは嫌いかという思いをきちんと話してくれるようになりました。そのことについて、お互いに議論ができる時間が持てるようになりました。

嫌だ、嫌だと言いながらも、話題を出してくれたり、自分の家の近くで講演会があると、「おまえ、また来るか。この前こんなチラシが入っていたぞ」と話してくれるようになりました。繰り返し繰り返し、本気で向かい合うっていうことは、一度には無理でも、少しずつでもこっちを向いてくれるようになるんだなと思います。

私たち同和地区外の人間が、本当に、同和地区の若者が「自分は同和地区の人間だ」と伝えなくても、自分はこの村や町の間人だと、固有名詞のふるさとを伝えるだけで、それだけで認め合える社会を作る仲間を広げていきたいなと思います。

皆さん、そう思われませんか？そのために、こういう人権教育の場があるんだと思います。皆さん、仲間になって、ここにいる人から、自分の周りから、一人ずつから「おかしい」ことを「おかしい」と言える地域を作っていきますよ。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。(しみじみと)言葉がね、自分の中に染み込んでいきます。そんな精一杯の言葉を伝え合う。そんな場にしていきましょう。思いをつないでくれたらと思います。いかがでしょうか。…はい、じゃあいきましょう。

《フロア N》

神奈川県の中学校から来ました。昨年も、A先生とのつながりでこちらに参加しました。今年も中学生や高校生が発言されると思うんですが、昨年、子ども達が発言していきながら、私もいろんな思いがあったんですが、発言せずにそのまま帰りまして、後で、「発言すればよかったな」という思いがあったんですね。

今日は発言してみようと思います。なぜ、神奈川あたりから来ているのかというと、A先生とのつながりから、昨年もそうでしたが、皆さんからパワーをもらって帰れたということがありました。

今日のお話の中で、Bさんが言われた言葉の中で、正確には書いていないんだけど、「いろんな知識を得て、交流して仲間が増えた」とありましたが、実際に神奈川にいて、同和問題について学習するチャンスはありました。社会教育主事をやっていた時というのは、学習はできたけれども、やっぱりわからない。差別をされているということは、差別されていなければわからない痛みというのはあると思うんだけど、理解しよう、理解しようと思ってもなかなかわからない。

十分わかることはできないとしても、今回もそうですが、実際に話を聞いて、日頃学校で仕事をしていると、知らない間に子ども達やあるいは大人との関わりの中で傷つけることを少なくしたいし、それから、「おかしい」とか、「それは違うんじゃない」とその場で言えるのが私かもしれないという思いでいます。

Bさんの最後の結婚の話なども、去年は重いけれど「若いってすごいなあ」とパワーを見せつけられたり、「大変だけれど、将来が明るいなあ」と思って帰りました。今年もお話を伺って、神奈川まで遠くて本当に申し訳ない。近くにいれば会うことができたり、励ましたりして一緒にやれるなと思います。結婚ってやはり、2人のことだと思うんですね。お互いに気持ちを確かめ合って、新しい出発をしていくわけですから、祝福できる結婚にして欲しいなと思います。

これから大変だと思うんですが、このフォーラム、私は楽しみにしています。最後に言っておられましたけど、来年、再来年また来ますので、またこのフォーラムの時に良いお話を聞かせてもらえたらなと思います。よろしくお願いします。(拍手)

《コーディネーター A》

(ゆっくりと噛みしめるように)さまざまな立場の、さまざまな年代の皆さんが、ドキドキしながら挙手をされ、必死に言葉を伝えていく。その言葉が会場全体に広がっていく。人権啓発の主体として、一人一人が参加しつくる人権フォーラムです。私に何ができるか。私の言葉が、多くの人にどのように広がっていくのか。私自身の人生がどう豊かになるのか。自分のために自分を伝える。そんな語り合いを大事にしたいなと思います。

ぜひ、マイクをつないでくれたらと思います。挙手してください。…はい、どうぞ。

《フロア 女性》

失礼します。香川県小豆島から来ました。私は、今回3人の方々の話を聞かせていただいて、すごく自分自身が恥ずかしく思っています。それは、私が24年間生きてきた中で、部落差別と真剣に向き合い始めたのが1～2年前からです。それまでは、間違っただけばかり聞いていました。それで、今、恥ずかしく思っています。

今回、3人の方々の話を聞かせていただいて、自分は何ができるかと考えたところ、間違っていることは間違っていると言える自分になりたいです。終わります。(拍手)

《コーディネーター A》

精一杯の言葉が会場に温かい雰囲気をつくっていきます。どんどんつないでいきましょう。どうぞ。(スタッフに、発言者を示し、マイクを渡してもらおうよう依頼しながら)すみません。(マイクが渡ったところで)はいお願いします。

《フロア 男性》

失礼します。前のパネリストにいますDさんと一緒に働いています。私たちが働いているところは、中央隣保館といいます。4名しか職員がいません。今日、ここに3名来ているということは、ここに来たかったけれども来られなかった1人がいます。そういう支えの中で、同和教育、人権教育が進んでいくのかなと感じています。

私は、この4月から隣保館に勤めるようになりましたが、それまでは、学校教育の方で38年間子ども達と共に過ごしてきました。同和教育から人権教育へ名前が変わりましたが、それも含めて、今の子ども達はさまざまな問題を抱えています。

今日、ここに参加しておられる皆さんは、いろんな思いを持って参加しておられますけれども、そういうことに一切関わりなく、いわゆる無関心で過ごしている子ども達もたくさんいます。

なぜそうなるのかと考えてみましたが、38年間終わったところでの結論としては、やはり指導者の問題かなと思います。指導者として、もっと自分を語って、以前、「差別の現実に学ぶ」ということなどが流行りましたが、今こそ、そういうことが必要ではないかなと思います。

問題があれば、すぐにその場に行って話をして解決するとか、解決の方向に導いていくとか、または、自分自身が一緒になって話ができる。そして子どもの顔を見たら、「何か今日は少しおかしいな」ということに気がつける。そういう教師になっていかなければならなかったのかなと、今、終わった段階で反省をしています。

私は、自分でできなかったことの反省もふまえて、もっともっと人権感覚を磨き、感性を高めていくために、今、隣保館活動をしています。年齢は違いますが、私よりもはるかに若い人たちからいろいろなことを学びながら、今度は学校教育ではなくて、社会教育の立場として、「人権の街づくり」ということで、安心

して暮らせる街をつくってほしいという願いで、今、隣保館に勤めています。絶対にみんなの力で、安心して暮らせる街を作っていきたいなと思っています。(拍手)

《コーディネーター A》

この大勢の中で、マイクを握って自分のことを語る。そのことが、とんでもない大きな力を私たちの中に残していきます。C君が、板野中学校の全体学習のことを報告してくれました。

教師が自分を語ったから、子ども達も自分を語るようになりました。その子ども達の語りが、また、教師の語りを生んでいきました。その関係が学校の空気を一変していきました。人権教育のよろこびが、互いの信頼と尊敬の絆の中で確かなものになっていきます。

言葉というのは、本当に大きな力を持ちます。仲間を信じ、仲間を尊敬し、ひたむきに歩く。そんな関係性の中で、私はこの学校に勤めてよかった、私はこの学校に通えてよかった。私はこの職場の仲間と出会えてよかった。この地域社会でさまざまな交流ができる。その人間のつながりが生きるよろこびになります。そんな自分を作って行く、精一杯の言葉を吐き出し合っていく。そんな時間を大事にしていきたいと思いません。

たくさん、中学生、高校生が来てくれています。中学生集会で感じたこと、思ったこと、また、3人の話を聞いて自分の中に広がった思い。その思いを一生懸命言葉にしてくれたらうれしいなと思います。挙手してください。(手の拳がった男性に向かって)行きましょう。

《フロア M》

米子市の中学校の教員をしています。「わがこと」というテーマなんですが、私自身が中学校の教員になってから、地区の子ども達に「差別に負けるな」ということを言ってきました。

その中で、「差別に負けるな」という言葉の意味をずっと考えてきて、子ども達との出会いの中で出た結論。これは、当たり前なことなんですが、差別に負けるということは、自分自身が自分自身を差別することだ。自分自身とつながるものや人を、自分自身が差別していることだ。そこから解放されなければならない。僕自身が、中学生との出会いの中で、つながることができたと思うことがあります。

僕の兄が車イスに乗っているんですが、そのことが言えなかった。その時に、地区学習会に来ている子ども達が、「同和問題、それどうしたの」という子ども達との出会いの中で、この子ども達とつながりたいと思ったんですね。そこで、自分自身のことをずっと伝えていったことがあります。そうして、その子らとつながれたんだと自分では思っています。

語ることによって、自分自身の本物が見えてきた気がします。差別に負けていた自分が悪かったんだと思えて、スッとしたんです。そこから、同和教育にはまっている自分があります。あと、そういう子ども達との出会いの中で、先ほども話があったかと思いますが、中学、高校を卒業して、結婚差別に出会った子どももいました。その、結婚差別の話をずっと聞いてくると、結果的には親も差別をさせられているんですね。

やはり、差別はいけないということはわかっているんですが、でも、差別をしてしまう心が人間の心の中にできてしまう。だから、差別というのはどこにあるかといえば、人間の心の中に生まれるものだと思います。

私自身、同和教育のおかげで結婚できたというところがあります。これは部落問題ではないんですが、違う問題で連れ合いの親から反対されていました。その時に連れ合いは、「私たちは間違っていないんだ。ケンカさせられるはやめよう」とずっとそれを伝え合ってきたんですね。「問題は2人への問題でもないし、向こうの親と僕との問題でもないし、親と連れ合いとの問題でもないし、本当の問題というのはここにある

よな」ということを整理していく中で結婚できて、今、1歳2ヶ月になるかわいい息子がおります。

その子をおいて徳島まで来たんですが、いろんなつながりで、僕自身が解放されたことがあって、今日、中学生も来ていると聞いていまして、その子たちの思いを聞かせてもらって、また、自分の目の前にいる子どもに返してあげたいと思っています。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。じゃあ、マイクをお願いします。

《フロア 中学生》

私は、徳島県の北島中学校の2年生です。私は北島町内の部落外で暮らしていて、小学校の6年生の道徳の授業で「同和問題」のことを勉強するまでは、同和地区があるとか、部落差別があるということを実際に知りませんでした。

中学生になって、人権学習という授業があって、そこで「同和問題」とか出てきたけど、「同和問題」を話している人とか同和地区の人とかがあまりなくて、私は、身近にそういうことを感じられなくて、自分の中で興味が湧きませんでした。

でも、中学1年生の夏休みに、「中学生集会」とか「人権フォーラム」に参加して、同和地区の人とかに話を聞くことで、本当にその差別に対する痛みを知ることができました。そのことを作文に書いて、みんなに話しました。みんなが痛みとかをわかっていかなければいけないと思うので、これから夏休みが終わって、学校に帰って、人権学習でしっかり自分の学んだことを伝えていきたいです。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。何かの縁があってこの場に来た。そんな思いを伝えていく、そんな時間にしていきたいと思います。いきましょう。(手の上がった男性に)はい。じゃあ、お願いします。

《フロア M》

愛媛県の愛南町から来ました。先ほどのBさんの発表の中にもあったんですが、教育委員会にいます。今日、この会場に来て一つ感じたことを話します。部落差別を笑い飛ばして語るのは、ここ徳島県の地元のN君と、山口市のK君だけだと思っていたら、米子にもいたんですね。(壇上でパネリストのDさんが笑顔を返す)機会があったら、愛南町の方へも、日本海から太平洋をめざして来ていただきたいと思います。講師料はわずかですけど。(笑い)

本題なんですが、先ほど、Bさんから話があったんですが、「愛南町では」というよりも、愛媛県では、「ここに同和地区がある」「ここに同和地区の人間がいる」という前提で授業をすることはありません。仮に愛媛県にあっても、どこかよその地域にという「よそごと」のように部落問題を語っていきます。

当然の如く、子ども達も「ひとごと」で聞いています。そういう状況にしながら、子ども達は、「あそこは地区だ」ということを、しっかりと親から、周りから聞いて、しっかりと偏見を持って育っていきます。

そういう状況で、やっぱり、表面に出さないことには始まらないんじゃないのかなという思いを持って、ある意味、賭けの部分もあって、「解放未来塾」を立ち上げました。それを町内でどういうふうにPRしていくか。先生が、「愛南町にも部落がある」と伝えた時に、「先生がそういうことを伝えていいのか」ということを含め、指導者の中で「誰が伝えるのか」、そういう議論がありました。

その時に、「私が」ということもありましたが、私が話をすると、「同和地区の人間だからそういうことが

言えるんだ」ということで、さらっと流されてしまうところがあるのではないか。そこで、こういうことを先生が言うということは、聞く側にとってはすごくインパクトがあるのではないか。

「ここに同和地区がある」ということを伝えない方向での授業、しかし、現実を伝えていかなければ始まらない。その葛藤の中で、先生が報告をしました。でも、その思いがあって今5年目です。今日も、ここでBさんが発表できるように育ててきたということに、私たちは、本当にやってきてよかったなあと思つづく思っています。

地区があるということ伝えることによって、町全体の同和教育に進展というか、正面を向いて聞いてくれる人が増えてきたように思います。まだまだ全体には浸透していませんけれども、本当に、子ども達が町を変えていく。子ども達が同和教育をしていく。そういう意味でものすごく成果は上がっているように思います。

今、私たちが一番心配するのは、「解放未来塾」は、小学5年生から高校3年生までの子どもたちが参加しています。塾長としてみんなを引っ張ってくれたBさんが、高校を卒業し、地元を離れて松山に行って、あれだけ一生懸命にどの場にも話してくれていたのが、大学に行って1人になった時に、やはり、機会が少なくなってくると、段々当時の思いが小さくなっていく。

これは、仕方のないことかもしれませんが、未来塾でやってきたことが、そのまま、「あの時を思い出してもう1回がんばってみよう」と思えるくらいに、高校3年生までの子ども達にしっかりと指導していかなければと思います。そこが一番の課題だと思います。先ほど、Dさんに来て欲しいと言ったのは、同和教育というのは、しんどいだけではなく、そのしんどさをパワーに変えられるくらいのもので大切だと思います。

今日、この会場でDさんの話しを聞いて、自分もすごく「また頑張ろう」という気になったし、そのことを子ども達が聞いてくれることによって、「頑張りたいな」という気持ちになって欲しいなと思います。

先ほど、K君やN君の話しを出しましたけれども、未来塾の子ども達は初めて2人の話を聞いた時、本当に、N君や、K君のようになりたいと言って頑張った子がいます。そういう出会いをすることによって、その子の考え方も変わってくると思います。(拍手)

《コーディネーター A》

いろんな思いに出会いたいと思います。続いていきましょう。…はい。じゃあ、お願いします。

《フロア K》

失礼します。私も、愛南町、Bさんの故郷からやって来ました。今日、私が一番心に残ったのは、Dさんの「生まれてきて、差別されていい命など一つもない」その言葉です。私は、今、中学校の養護教員をしていまして、人の命の大切さというところでは、子ども達に伝えてきてはいたのですが、「差別されていい命など一つもない」という言葉を子ども達にも伝えていきたいなと思いました。

Bさんは、保育園の時から知っていて、私の子ども達と一緒に遊んでいたのですが、まだ私は子ども感覚でいるのですが、その、Bさんが結婚問題で悩むというか、いろんなことを考えていることに対して、「なぜこんな結婚差別を」というか、「くだらない差別」に対してすごく腹が立って、怒りを感じています。

私は、以前、地区のない学校に勤めていました。その時に、「解放未来塾」が立ち上がって、一緒に参加させていただいたんですが、私は、「子ども会」のような感覚から入っていったので、いろいろな人たちの深い思いを知らないまま参加していました。

でも、そこに参加しているあどけない子ども達の顔を見ると、「地区のない学校だからこそ、私たち

が勉強しなければいけないのではないか。この子たちが勉強する問題ではないな」という思いを非常に感じて、その学校の先生たちと子ども達と共に、町の「人権ふぉーらむ」などに参加して、いろんな機会に勉強させてもらいました。去年から、今の学校に変わってきました。

ここでも、「解放未来塾」の子ども達が、1部落に1人いるかいないかで、いろんな思いを抱えているんだろうなと思っています。日頃は明るく楽しそうにしているんですが、寂しかった部分もあったんだろうなと思います。そういう子ども達にとって、「解放未来塾」は、ホッとする場だと思っています。うれしいことなんですが、学校もホッとできる場所や、安心できる場所を、先生たちと共にまた作っていかねばいけないんじゃないかなと改めて思いました。今日はありがとうございました。(拍手の中で、マイクが次の発言者に渡る)

《フロア F》

香川県の小豆島から来ました。毎年来させていただいて、夏の終わりにはこの鳴門で、いつもこの会に出させていただきます。

いつも出会える顔があったり、毎年新しい出会いがあったりして、本当に楽しみにしています。ぜひ、またDさんも小豆島に来ていただきたいなと思いますし、C君のような教員が地元からも育てて欲しいなと思います。うちの子ども達が今日来ていますので、Bさんの思いに対して、何か、多分いっぱい思いがあると思うので言ってくれなと思います。

本当に小豆島でも、切ない現実はいっぱいあります。やっぱり、こんな思いで地区の子ども達が教室で生活しているんだとか、地区のお父さんお母さんのこんな思いがあるんだと、学校の現場の中でみんなと共有しながら話し合うことが、なかなかできなくて、それをどうやって変えていくかと日々思っています。

小豆島にもたくさん学校がありますから、東側にあるのが例えば「内海中学校」だと、10年ほど違う学習が少しずつ進んできました。A先生にもお手伝いいただいて、全体学習が始まったり、そういう現実の中で、少数点在で地区がない南側の学校に僕も転勤したんですが、こちらの学校に来たらずいぶん空気が違う。

前の学校にいた時は、たくさん地区外から結婚してお母さんとか来るわけで、やっぱり空気が違います。結婚はしていても、故郷からは関係性を切られて、子ども達の中には、「そっちの町にいるじいちゃん、ばあちゃんに会ったことがない。会ってくれないんや」という現実が何人もいました。そういう中で、じゃあ、どうしたらいいのかということを考えているところです。

毎年、毎年このフォーラムにやって来るんですが、今、少しずつ一緒にこのフォーラムに来てくれる仲間が増えてきました。それは教師だけではなく、いろいろな立場の人だったりします。今年は、自分の学校と一緒に勉強している子ども達が一緒に来られたので、これが僕にとって、今年が一番うれしい出来事になりました。ここからまた一つずつ輪が広がっていったらいいなと思っています。またよろしくお願いします。(拍手)

《コーディネーター A》

限られた時間です。本当に大事にしていきたいと思っています。どんどんつないでいきましょう。(フロアを見回して)いきましょう。

《フロア Y》

応神中学校で教員をしています。Yと言います。Dさんの話の中で、「生まれてきて、差別されていい命なんてない」その言葉を聞いた時に、何年か前の中学3年生を思い出しました。

その子は、被差別部落の女の子でした。生まれてすぐに、お母ちゃんが家を出て行った。お父ちゃんも、数年経ったら家を飛び出して行った。小さい時からおじいちゃんおばあちゃんとしか生活していない。その子は、日頃は滅茶苦茶明るい子なのですが、先ほどから出てくる全体学習の中で、絞るようにしてこう言ったんですよ。

「お母さんもおらん。お父さんもおらん。そんなんやったら、何で私を産んだんって思う。そんなんするくらいだったら、私なんか生まれて来ん方が良かった。産むんやったら、ちゃんと責任持ってわが子をみてよ。私なんか生まれて来ん方が良かった。」

思わずね、言ってしまいました。「生まれてこんでいい命なんてない。」その子のおばあちゃんのお姉さんは、結婚差別で命を落としています。

教員になりたての時に、あるお父さんに家に呼ばれて行きました。初めは、教頭、担任、私の3人で話していました。教頭も、担任もおらんようになって、私だけ残りました。お父ちゃんはグラスに酒を持ってきて、酒を飲み始めるんです。

それまで堅苦しい話だったんですね。「先生、苦労しよるなあ」「はい！」そう言いながら酒を酌み交わす。それまでは、しかめ面をしていたお父ちゃんですが、話をしていくうちに、身の上話をしてくれる。

わが子への思い。今、生活している悩み。そのうち、晩飯が出てきて、「先生、晩飯食べて帰れ。」そのうちに、お父ちゃんが横になって寝始める。それで子どもに、「先生、先に帰るけんのう」と言って家に帰りついたら、子どもから電話がありました。「どうしたんだ？」と聞くと、「お父さんが、無事に家についたかどうか心配だから電話しろと言うから、電話しました。」

なんちゅう、温かいお父ちゃんだと思いました。そのお父ちゃんは、私が板野中学校に変わった次の年に、亡くられました。電話がかかってきて、「お父ちゃんが亡くなりました。」

教員になって、わかったことですが、30歳代で亡くなった部落のお父ちゃん、お母ちゃん、異様に多いです。死を急ぐかのように亡くなっていったお父ちゃんお母ちゃん本当に多かったです。浴びるように酒を飲んだお父ちゃん。浴びるように薬を飲んで、命を縮めたいかのように亡くなっていったお母ちゃん。本当に多かった気がします。僕は、そんな事実を何かの形に残したいと思いました。消したくないと思いました。

だから、C君が言ってくれましたけども、人権劇の中身はほとんど事実です。事実をずっとつなぎ合わせたんです。消したくなかった。板野中学校で、この人権劇をNO1・NO2・NO3とやりました。応神中学校に変わってから、「劇の方はもういいな」と思ったんです。

でも、他の先生が、「何か劇のシナリオない？」と言ってくれたんです。それで、この劇のシナリオをポンと出して、「これやるわ。」と言ってNO1・NO2をやりました。ここまでやったらしかたないなと思ってNO3をやりました。NO3をやったら、NO4やろか。NO5やろか。NO6やろかとなって、6作品作りました。

ただ、「C」を知らない子が、「C」の役を演じているのです。(ニコニコと)何人も「C」がおるんです。それは、滅茶苦茶いるんですね。こうして何人も「C」を演じてもらいながら、ありがたいなというふうには今は思っています。応神中学校で、今、「C」は7人目になります。

今日は、「人権フォーラムに行かんか」と言ったら、「行きます！」と言ってくれた生徒4人を連れて来ることができました。なかなか道のりは険しかったのですが、今は、こういう状態にまで持ってこられて、本当に良かったなあと思っています。

僕は、40歳代はもういいです。30歳代ももういいです。10歳代、20歳代の次の世代を育てていきたいなと思います。BさんやC君など、20歳代と10歳代で、勢いのある「よっしゃ!!」というような、そんな子どもをこれからも学校教育の中で育てていきたいなと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

この場所には、10歳代の若者の姿、20歳代、30歳代、40歳代、50歳代…とさまざまな年代の人たち。いろんな年代の方が集まっています。みんながマイクを握れるんです。自分自身のことを言えるんです。

こんな切なさがある。こんなしんどさがある。いや、こんな誇りがある。こんなよろこびがある。その言葉が私たちを変えます。本当に限られた時間、皆さんの思いが会場全体に広がっていく時間にしていきましょう。挙手してください。(中学生の手が挙がり、指名されると、しっかりと語り始める)

《フロア 中学生》

香川県小豆島から来ました。私の地区では、4月ぐらいから部落の人が集まって話し合うようになりました。その中に参加した時、たくさんの人の辛い経験を聞きました。

年が重なるにつれて、辛い経験も多く、その人たちの意見は、「もうぶり返したくない」「私たちが差別について学んでも意味がない」「私たちではなく、他の人が学ぶべきだ」そう言いました。その言葉にはすごい重みがあると思います。

それと同時、身近にある苦しみ、差別の実態を感じました。しかし、逃げてばかりでは何も解決になりません。もう一度向き合うことは怖いことかもしれないけれど、将来同じ思いをする人が減るためにも、立ち上がるしかありません。そう考えると、差別ってすごく重いものだなと感じました。

また、人の心を簡単に壊してしまう、あつてはならないものだと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

(立ち上がり、次の発言者を手で示し、発言を促す)いきましょう。

《フロア 中学生》

何を話そうとしたか忘れるくらい緊張しています。前の人が話してくれたのは、大体部落差別ことだったんですけど、僕の担任の先生の友だちが、部落差別ではないんですが、身元調べをされて嫌な思いをしたということがあったらしいんです。

僕も「あかんだろう」と思ったし、また、「こんなことをしていいんか」と思うことがよくあります。部活をしても、こういうチームワークが乱れることがよくあったり、嫌な思いをするということは本当に嫌なので、こういうことをなくしていければいいかなと思います。(拍手)

《コーディネーター A》

(立ち上がり手を伸ばし、スタッフに会場の反対側で手を挙げている男子中学生を示し、マイクを依頼する。)

《フロア 中学生》

僕は、名前は「健人(けんと)」と言います。ちなみに、僕の名前の由来は「健康な人」です。(会場にDさんの質問がよみがえり笑いと拍手が起こる)僕も、Bさんが言ったように、最初は、人権問題の勉強などをするのは嫌いでした。

「人権問題の勉強は嫌い」と思っていた僕を変えたのは、「人権を語る中学生交流集会」という会です。最初は、暗い硬い会かなと思ったんですけど、行ってみたら、結構、「人権」のことを明るい雰囲気ですべて語られている人がいました。

当時1年生で、緊張してしゃべれなかったけど、次の年に「副実行委員長」という役目になって、そこで初めて発表ができました。「発表をするのはこれだけすっきりするんだ」と思って、そこで初めて中学生集会在楽しいものになりました。

そして、今年、「実行委員長」という大役を果たし、緊張しまくったんですが、みんなの力を借りて成功することができました。ありがとうございました。

中学生集会是、僕の一つの誇りでもあるし、中学生集会上に参加して、ごつい友だちもできたし、発表もできたし、僕の14年間の人生を変えた出来事でした。本当に中学生集会上に参加してよかったです。終わります。(拍手)

《コーディネーター A》

(うれしそうにしみじみと)皆さん、今の自信に満ちた言葉を聞きましたか?(一枚の大きな文字で「中学生交流集会上」と書かれ、笑顔あふれる中学生が描かれた紙を会场上に掲げ示しながら)これが、「人権を語り合う中学生交流集会上」の、今年のポスターです。(この中学生集会上は)15年前に始まりました。

学習会上で同和問題を学んでいる地区の子ども達が、「高校へ行った時、決して部落差別につぶされることがない。そんな人間関係をつくりたい。」そんな思いを、マイクを握って次から次へと語っていきました。舞会上に立つことです。その舞会上が子ども達を変えます。その子ども達が、また、別の子ども達を変えます。そして、やがて学校を変えていきます。

そんな関係性が、私たちの地域社会を本当に豊かなものにしていくんだと思います。中学生の意見が出てきました。いろんな年代の人からの思いを共有できたらともいます。(身体を大きく前に伸ばし、身体中で発言者の意見を促す)では、いきましょう。

《フロア N》

(ニコニコと笑顔で会场上の前に移動しフロアに向かって語り始める)皆さん、こんにちは。さっき、Y先生がいらんことを言われよった徳島県の30代の男性です。(会场上に大きな笑い)僕は、こういうところで話すということはあまりないんですけど、今日は有休をとって午前10時半に会社から帰りました。A先生には、「昼は来んでもいいから、夜は来いよ」(笑い)と言われていたんですが、でも昼も来たいと思いました。

去年から参加させてもらっているんですが、米子市のDさんがしゃべるということを聞いていたので、Dさんの話しを聞いてみたいと思って来ました。Bさんの意見発表の中で、「彼氏にどういうふうに伝えていたら」と言っていました、今の高校生自身もそう言って悩んでいる子がいっぱいいるんですよ。

そして、その子らに相談された時に答えるのが、「連れて来い。俺やのところに。」ということです。高校生と会をして、そういう悩みとかを聞いたりする時に、仲間がいっぱいいるところで、自分ではどうしていいかわからんと悩んでいる子と自分たちも一緒に語って、その悩みを解決したいということはずっとしてきて……。その悩む子と…一緒に幸せになりたいと、ずっと伝え続けています。

今は、俺も地区に生まれて、学習会上に行って、そこで先輩から差別の現実とか聞いて、中学校時代から差別に出会ってきて、結婚差別も2回受けました。…何で2回も受けるのかということですが、多分知っている人は少ないと思うんです。夜の交流会に参加される方は、その時にしゃべろうかと思っているんですが、2回目の時に、「できちゃった結婚」だったんですよ。

…(何度も言葉に詰まり、涙ぐみながらしぼりだすように言葉をつなげる)俺の連れ合いの親は、差別者だということは自分自身は知っていたんです。結婚して一緒に住みだして3年経つとるんですけど、…向こうのお母さんと、僕は会ったことがないんです。お父さんとは、「できちゃった結婚」で、「すみません」と無

理やり家に押しかけて、その対応してくれた時に1回だけ会ったんですけど。

…駆け落ち状態で家を飛び出して3年です。でも、それから以降も、向こうの親は…いろいろ気使いしてくれて、あくる日だったか、荷物持って出ないということで、車と荷物を、知り合いの人を経由で届けてくれたり、何ヶ月かに一回は「元気にしよるで？」と連絡をくれたりとかしとるんです。お母さんが自分が手術を受けるという連絡に、娘はショックを受けたりすることもあるんですが。

こういう差別の現実が残っているということは、中学生、高校生にしゃべることによって、その時に助けてくれた仲間がおる。(笑顔で)助けてくれた仲間は、多分、後で子どもを連れて、(自分の着ている、赤字に白のペンシルストライプのポロシャツを指差しながら)こういう服を着て(会場に誰のことを示すのかわかる人の間で大きな笑いが起こる)前に出てしゃべるかなと思ったり、山口から5時間かけてとんで来てくれた人もおる。

そういうふうな仲間のもとで、自分が今ここで生きておれるということを伝えていきたいなと思っています。(拍手)

《コーディネーター A》

ありがとうございます。皆さん、5時間かけて山口県から来てくれる仲間。今日も神奈川県からも来ていただいています。本当に、この時間を大事にしていきたいと思います。時間がもう少しです。挙手して発言してくれたらうれしいなと思います。

じゃあ、今、手の挙がっている人の発言を保障して終わりにしましょう。ちゃんと確認しましょう。(会場内の手の挙がっている人を確認し終わると)はい。じゃあ、そちらから…。

《フロア 中学生》

応神中学2年生です。正直言って、私は、部落とかあっても、そのこともよくわかることもできなくて、いつも、きついことばかり言って人を傷つけてばかりだったんですけど、人権学習の授業の時に、友だちの同和地区の子が、同和地区外の私たちに対して「同和問題のことを真剣に考えてほしい」と訴えてきてくれたんです。

その時は、(笑顔でしみじみと)感動というか、尊敬してしまって、本当に、テレビに出ているモデルさんよりも本当にきれいだなと思ってしまって、その子と友だち関係におれることが誇りに思いました。(拍手)

《フロア 中学生》

応神中学2年生です。私は、部落出身で、さっきも友だちが言っていたんですけど、私はそんなにきれいではないんですけど、(会場内に明るい笑いが溢れる)…まあ、ぶさいく…(笑い)…並大抵です。

私は部落出身です。そのことを小学校5年生の時に母親から聞かされて、「ああ、部落なんだ」と思いながら中学1年生まで来て、小学校6年生の時にも「汚染め一揆」を習ったんですけど、部落のこととか、全然習っていなかったの、「ああ、いけないのと違うかな」というような感じでした。「汚染め一揆」のこととかよくわからんままに、「ああ差別はいけないんだな」という感じで中学校に入って、Y先生と出会って、「人権」とか、めちゃ叩き込まれて。

…半年くらい経ってから、結婚差別の資料とかをもとにして、「語り合いの学習」が始まってきたんですけど、最初は、自分で「わがこと」とか考えていても、その時には、自分自身が「ひとごと」でしか考えていなかったと思います。

自分も「ひとごと」なんですけど、相手が「ひとごと」であることが許せんような気持ちになっていったん

です。自分が偉そうなことは言えないんですが、口で「もっと真剣に考えてください」と言っている私も、言いながら、自分も「ひとつごと」だったと気づかされたんです。「語り合いの学習」というのは、毎回して欲しいと思いました。終わります。(拍手)

《フロア 中学生》

私は、この「人権フォーラム」に初めて参加しました。はじめに同和問題と聞いた時は、どんな問題かわからなかったんですが、道徳の授業などで学習しているはずなのに、やっぱり、「ひとつごと」と思っていて、自分が無関係で忘れてしまっていたんだと思います。けど、いろいろな話を聞いて、「ひとつごと」から「わがごと」に考えるようになりました。ありがとうございました。(拍手)

《フロア 高校生》

小学校までは「ひとつごと」の、先生によく思われたいくらいの発言だったんですが、中学校に入って、道徳で同和問題を勉強して、その時クラスには同和地区出身の人はいませんでした。

先生が、「1回、家に帰って親と同和問題について話をしてみてください」と言われて、その後、親友が、「困った!」とすごく言っていました。「何?」って言うたら、「私のお母さんが、結婚の時、同和地区の人と結婚したら許さんと言った。」と言いました。その子は、すごく明るいんですが、「どうしよう。どうしよう。私のお母さんってどうなるとるん」と悩んでしまったんですよ。

それで、「わがごと」になって、担任の先生もすごく熱心で、一生懸命道徳を勉強して、これまでの自分がどれだけ無関心な生き方をしてきたか。それを振り返ってよかったですと思います。

それで、今の悩みは、学校で一緒に人権のことを語れる友だちが少ないことです。「今の高校生」という定義があって、高校生らしいというのは遊びまわるみたいな感じで、こういう会に来たら、「何?その会」って言う子がいます。だから、もっと考えていけて、自分の人権を守るのも変えていきたいです。(拍手)

《フロア 中学生》

このフォーラムに参加したのは2回目で、去年参加させてもらったんですが、発表できなかったのが今年はしたいと思います。私が同和問題について知ったのは小学校の時で、道徳の時間に、『山の粥』っていう学習しました。でも、その時は何のことかも全然わからずに、授業中も「眠いなあ」と、そんなことばかり考えていて、「ひとつごと」として考えていました。

中学校に入って、同和問題について学習してきて、少しずつ「もっと知りたい」と思うようになってきました。前に、親に「同和問題についてどう考えとる?」と聞いたことがあって、そうしたら親が、「同和問題って、別に知らん者も多いのに、教えていくけんずっと広がっていくんじゃ」と言って、「何でやる?」と思いました。

「寝た子を起すな」という意味だったと思うんですけど、私は、同和問題を勉強していくから、少しずつなくしていきたいと思う人が多くなると思うので、同和問題の勉強はした方がいいと思うんですよ。だから、親がそういうふうにしたのが悲しかったです。

そういうふうにしたのは人権学習のおかげなので、この学習をずっと大切にしていきたいと思います。今日ここにきていない友だちとかにも、今日のことを伝えていきたいです。(拍手)

《フロア 中学生》

今日の3人の話で、Dさんの両親がどちらも部落出身やったというのが共感できて、それを聞いたのは本

当に1～2年前で、父さんは部落出身やったということは知っていたんやけど、父さんから、「実は母さんも部落出身なんや」と聞かされて、その時は本当にびっくりしました。Bさんの話にもあったように、「自分に結婚する相手ができたらどうする？」と、父さんに聞いてみたら、「おう、おまえ、その男を一回家に連れて来い。一緒に酒飲んだるわ。」と言ってくれてうれしかったです。今日、この人権フォーラムに参加できて、本当にパワーをもらって帰れます。ありがとうございました。(拍手)

《フロア 中学生》

私は、同和地区に生まれて、Bさんは「人権の授業が嫌いだった」とか言っていたけど、私は、そういう授業が好きとか…。何で部落出身なのに自分が好きなのかわからんけど、自分は、部落出身とかいうことではなく生まれたとしても、きっと同じように思います。

今、私と接してくれる友だちは本当の友だちだと思っているからだと思います。内海中学校では、人権集会で人権劇をして、部落差別や、原爆差別、身体障害者の差別など、いろいろな劇をしています。その後にみんなで全体学習をして、私はいつもその時に発表をしています。それは、聞いてくれている人が真剣に聞いてくれるから発表できるんだと思います。これからも本当の友だちを作っていきたいと思います。(拍手)

《フロア 中学生》

私のお母さんは部落出身です。お母さんが部落出身というのを聞いたのは去年のことです。お父さんは部落の人ではないと聞きました。お母さんは、お父さんの方のおばあちゃんになぜ嫌われているのか。口には出さないけど少し気になっていました。

同和問題についていろいろ勉強しているうちに、段々わかってきました。そこには「部落差別」という差別があったことです。何も悪いことをしていないお母さんを、部落出身というだけで差別をしているおばあちゃんにとっても腹が立ちます。

私は部落出身のお母さんと、部落の人でないお父さんの間に生まれた子です。その間にいる私が、その人たちの架け橋になれたらいいなと思います。これから、もっと同和問題について勉強していきたいです。(拍手)

《フロア 中学生》

俺は、小学校の頃は、人権についての授業は聞いていたのは聞いていたんですが、右から左に流れていたと思うんですよ。人権の話はずっと聞いていて、中学1年になって、友だちが中学生集会に来ないかと話しかけてくれたんですよ。

小学生までは、右から左に流していたんですけど、中学生集会に行って、仲間ができて話し合いをしているうちに、人権について真剣に取り組めるようになってきたんですね。今日のこのフォーラムにも呼んでいただけたし、このフォーラムでいろいろな人の意見を聞けたし、非常に良かったと思います。

この話を夏休み明けに、人権について取り組みがあれば、学校で、友だちといろいろな先生と話していきたいです。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

(マイクの渡った生徒に向かって)じゃあ、最後です。

《フロア 中学生》

中学生集会の時にも言ったんですが、私のじいちゃんが障がい者で、じいちゃんを差別していました。最近じいちゃんの状態が悪いとお母さんから聞いて、じいちゃんのところに行って、じいちゃんがめちゃ苦しんどるのに、何で自分は差別したんだろうと思って、自分に腹が立っていました。

昨日、じいちゃんの病院に見舞いに行って、じいちゃんに「頑張れ」って言って、私は家に帰りました。その日の夜に、お母さんから電話があって、「じいちゃん、死んだけん。」と言われて、今さらなんだけど、「何でじいちゃんを差別したんだろう」と思って…悪いと思いました。

…この後、お通夜があって、じいちゃんに何て言ったらいいんだろうと思います…。じいちゃんのためにも、障がいを持っている人のためにも、…障がいのある人を見たら、ちゃんと声をかけて接したいと思うし、…自分の友だちが障がいのある人に向かって変なことを言っていると思ったら、自分から「何を言ひよるん」って言いたいと思いました。

このきっかけを作ってくれたのはじいちゃんなので、今日は、「ありがとう」って言って、じいちゃんを死の国へ見送りたいと思いました。ありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター A》

皆さん、中学生の言葉、高校生の言葉。青年の言葉。その言葉の中に私たちの歩むべき方向が見えてくるんだろうと思います。

私は中学校の教師です。出会ってきた子ども達に、ずっと言ってきました。「みんなは私の夢なんだ。みんなと出会ったことが私の希望なんだ。共に部落を解放していく。差別をなくしていく。みんなは私の夢なんだ。」と…。

まだまだ、差別の現実は厳しいです。血を吹いています。昨年、N君がパートナーのHちゃんと共に語ってくれました。昨年のHちゃんのお腹には、子どもが宿っていました。後、3日か4日で生まれるという日にここへ来てくれました。その子が、後1ヶ月で1歳の誕生を迎えます。今日は、2人の子どもを連れて来てくれています。N君、ちょっと前へ。最後、N君に語ってもらってこの会を閉めたいと思います。拍手をお願いします。(拍手)

《フロア N》

ええー、皆さんこんにちは。僕は、去年のパネラーとしてこの前で語らせてもらった、Nといいます。ご存知の方はおられると思いますが、さっきA先生から紹介がありましたが、去年、連れ合いのHちゃんのお腹には、2人目の子どもが生まれそうだったんですが、無事産まれまして、名前は男の子で「音響」の「響」に「希望」の「希」と書いて「響希(ひびき)」という名前にしました。心配されていた方もおられると思いますので、皆さん方の大事な時間を使ってご報告をさせていただきたいと思います。

時間がほとんどないので、Hちゃんにちょっとだけしゃべってもらって、(私はいいと手で合図するHさんの姿がある)ええことないよ。ちょっとだけ。(Nさんは、Hさんから響希君を受け取り抱っこしたり肩車をする。会場内に明るい笑いが溢れ、笑顔でその様子を見ながら、Hさんはゆっくり語り始める)

《フロア H》

里温が産まれたときには、家族にも誰も来てもらえずというか、音信不通の状態と彼と2人で産んだんですけど、響希のときには、里の母親も来てくれて、母親と彼と3人で頑張ることが出来ました。

(里温君を肩車して、響希君をだっこしていたNさんが、動く子ども達にバランスを崩し、肩車の里温君を落としそうになり、会場が温かさの中にも思わず騒然となる。怪我をすることもなく落ち着き、コーディ

ネーターのAさんがすぐにNさんのもとに行き、里温君を預かり抱っこする姿にHさんは言葉を続ける)

里温の時にはこういうものなんだろうなと思って、1人で一生懸命頑張ったんですが、響希の時には横に母親がいるので、ちょっと甘えてみて、「痛い」「痛い」と言いながら腰もさすってもらったりしたんですが、しんどかったですが、すごくしあわせな時間でした。響希が生まれてからも、実家の方へもちょくちょく帰って、とても大事にしてもらっています。

(終わろうとすると、Nさんから「それだけ?!」突込みが入り、会場内に笑いが溢れる。Hさんからマイクを受け取り、笑顔いっぱいの中でNさんが会場に語りかける)

《フロア N》

皆さん、ありがとうございました。2人でやったことはたいしたことはないんですが、当たり前のことを当たり前に、Hちゃんも僕のことを100%信じてくれて、最後まで2人で信念を貫き通してこういうことになりました。

前におられるパネラーの姿というのは、きっと若い子に本当の意味での展望として写ったと思います。僕もこの2人の子ども達を、前のパネラーのような人間に必ず育てていきますので、皆さん、よろしくお願ひします。(拍手)

《コーディネーター A》

(立ち上がり)皆さん、長い時間ありがとうございました。1年に1回のパワーを蓄えあえるこの場を私たちは大事にしていきたいと思います。大切なのは日常です。中学生のみんな。この感動をクラスの仲間、学年の仲間、学校の仲間に伝えていってください。

学校が変わるんです。居場所があるんです。楽しいで、うれしいたまらん学校にしていくんです。そういう職場にしていくんです。そういう地域社会にしていくんです。そういう家族のつながりを作って行くんです。

いっぱい語ってくれました。いっぱい聞いてくれました。語ってくれた仲間に、聞いてくれた仲間に、最後精一杯の拍手をして終わらしましょう。どうもありがとうございました。(大きな拍手)

終了